
愛しさも、切なさも。

如月らむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しさも、切なさも。

【Zコード】

N61811Y

【作者名】

如月らむ

【あらすじ】

ある夜偶然に出逢ったのは、長年の海外勤務から帰国した男の人。『「兄」。気づいた時には既に立っていた禁断のフラグ。誰にも言えないオフィスラブ、決して赦されない 愛しくも切ない大人兄妹・極上の禁断 Love Story。他サイト様にて執筆した作品【愛しさシリーズ＜運命編＞ 改訂・完全版】内容・描写にかなり差がありますので、こちらをお読みする事をお勧めします。濃いめの禁忌ベッドsceneを多く含みます。

Introduction (前書き)

章「」に設けられた、みゆとアキの呼び掛けIntroduction。

これらはいずれも物語後半のあるトキのものです。
ぜひ、お気に入りながら読み進めてみて下さい。

Introduction

ねえ、アキ 覚えてる？

13年ぶりに偶然再会したのが この場所だったよね
アキも 私も お互いの事全然気づいてなくて
血の繋がりもない「他人」みたいだつたつけ

笑っちゃうよね。

あれから季節は変わりゆくのに
私の心はずつと、じじに。立ち止まつたままだよ…。

私たちの運命は やっぱり どうしても 変えられないものだった
のかな？

「愛しさ」とは永遠に、「切なさ」を越えられないものなのかな…

ねえ、アキ ？

できることなら もう一度。
それが叶うなら 何度でも。

あなたに、出逢いたい…

” あなたと出逢えたことが運命ならば きっと。

この恋は 永遠になる”

…出逢え、まよひこ

Introduction (後書き)

現在公開している『愛したも、切なさも。』とは内容が異なる箇所があり、新たなエピソードが加わっています。また性描写においては、より濃いめになる予定です。

#1 運命のイタズラ -?- -

sideみゅ

あなたとの出逢いまで、アト…1、2、 3歩。 ドン
ツ!!

『 あつ、ごめんなさ…!』

ここは、新宿のビル街。

残業からよつやく解放され、クタクタな足を引き摺り新宿駅までの道のりをフラフラと歩いていた時のこと。これはただの私の不注意?それとも誰かのイタズラだつたのかな?今私は、見知らぬ人の胸の中に真正面から頭を突っ込んでいたりしているワケで。

けれど早く離れなきゃ、きちんとお辞儀をして謝らなきゃ、といぐら頭で常識を反芻しても、思うように体が動いてくれない。クラクラする

「…また随分と凄いぶつかり方だな、前見てんのかよ…」

そんな 人様に大迷惑をお掛けしている私こと

桜木 みゅ(23歳)は、社会人2年目の言わば〇。

と言つても、勤め先・一流化粧品メーカー「プール・マショリ」の経営者はお父さんで

その娘の私は一般的に「社長令嬢」って呼ばれるみたいだけれど。

その大企業の社長令嬢がなぜ〇〇をしているのか…不思議だよね、私もそう思つ。

でもこれはお父さんとお母さんの願いでもあるの。

”みゆだけは家柄のシガラミに囚われず、極普通の女性として育つてゆきなさい”

”決して傲ることなく 普通の生活を、自由な恋愛を、じっくりありふれた幸せを”

「 何やつてんだよ いつまでそうしてゐる気? 」

： そうして数秒経たないうちにも

ガクガク震える足、ズルズルと崩れゆく視界、ゆらり遠のく意識。

軽く眩暈を起しこしている私に、彼の苛立ちを遣つてゐる余裕なんて勿論なく
目に映るもの追いかけるだけで精一杯だった。

： あ、洗い立ての匂い香る白いシャツ・良質のスーツ?・ネクタイ、
ベル、ト

「 …あのはな、！？ …どうした？」

そのまま私は軽い貧血を起しだらしく、数分気を失つていた様子で
気づけば初めて会つた男の人のワイシャツをシワクチャになるほど
握り締めていた。

私、ずっとここの人には支えられてたの ？」

スーツのその上を見上げてみれば

力強そうな腕、懐かしさに似た暖かさを感じる胸板、定間隔で響く

「おい」の呼低音

この抑揚のない響きに焦つてサッと見上げた先には、薄暗闇に光る
：切れ長の瞳

私を下に下に見下ろすその瞳は、温かみの欠片なく鋭く尖つていて
その瞳を引き立てるのはシャープな顎と、スッと通った鼻筋キリリ
と頬まし眉毛

そのパーフェクトな美形顔に胸の鼓動がドクンと一打ちした時
心までもが驚掴みにされてしまつ。

ねえ、一目惚れって、信じる？

他人に、一瞬で恋に墮ちると、思ひ…？

その人を見ているだけで、呪文にでもかけられたみたいに体は固ま
つて。

それでも体の芯から訴えかける鼓動はずつと加速し続けていて。
思わず手を当てた胸の鼓動が彼に届きそうな位…心が大きく、大き
く揺れ動く。

「気分が悪いなら医者にでも診てもらうといい。俺は御免だ」

なのに、トキメキ初体験も虚しく

彼は氣だるそうに目線を外し、不機嫌な顔つきでギリッと睨みつけ
る。

背筋も凍るその冷たい声で。素つ氣ない言葉を春風に散らして。

だから体の弱つてゐる私に返事をする暇も「ええず
何事もなかつたようにクルリと背を向けて歩き出す彼に

唔

然、呆然

え、ちょっと、感じ悪くない ？

私だって迷惑かけて悪かったとは思つてゐるけど、でもーー
もうちょっと人的な何かがあつてもよかつたと想つーー
ちょ、ちょっと男前だからつて気取つちやつて。

久しぶりのイケメンに奪われたこのドキドキどうしてくれるの?
貴重な乙女心、返して欲しーー。

ねえ、返してよ…

。

細めの体つきにスラーッと伸びた背丈
少し耳にかかる位のサラサラしてこなつた漆黒の髪
彼が 遠のいていく…。

何も語らない背中自信に満ち溢れた姿勢
後ろ姿にさえ心を奪われるなんて私、どうかしきつてしまふ。

もしも彼が心優しい人だつたら
ここから恋が生まれてもおかしくないハピーナンスだったのに
蓋を開けてみればただの冷血様。
なんて夢みたまことを思い巡らせていくと
何かを思い立つたように急に振り返る彼。

私を、見て、る…？

またあの突き放した口調で何か言われるのかな？それはそれで、怖
いっ…。

そう私がオドオドとしている合間にも

「シシリ」と靴の音を鳴らして一直線に私へと歩み寄る彼の音
その歩み寄る一歩一歩にじょうもなく鼓動を乱されて
高鳴る胸に手をグッと強く押し付けた。

だつてせつでもしないこと、この心臓」と「心」と。
思わず、恋を。してしまってなるから。

息のかかる距離に来ていた彼ら放たれた、目が眩む程の鋭い視線
その無言の威圧感にさえグラグラと心が揺さぶられていく。

「背中に視線感じたんだけ?」
何?
『お詫びと、お礼……を……』

私の目の前を通り過ぎていく彼の逞しく綺麗な指先が
迷うことなく長く伸びた私の一束の髪を持つていくことで、言葉まで奪われる。

「少し触れただけで期待して 本当分かりやすい女だな…」

お願い そんな風に見つめないで?冷たくしておいてそんなに優しく触れないで。

私の全てを、持つていかないで…。

そう私が身動きの取れないことをここに、腰を少し屈めた彼は
最後に…悪戯に。ただほくそ笑んだ。

「 欲しいならくれてやるよ

掴まれた髪の毛を軽く引っ張られると

その先に待っていたのは、肌と肌で感じるあなたの…温もり。

それは、突然のこと。

これは、偶然のこと。

「偶然」と言つ名の「必然」に変わる時。

私の唇は今さつき会つたばかりの男の人の温かな唇に包ま
れていた。

「他人」として初めて出逢つた、あなたの唇に。

ねえ、今の。何のキス ?

フワッと離れた彼の唇を思わず田で追つてしまつ。
挨拶代わりつて言つてもいい位さり気なくて
それでいて熱い何かを刻み込まれる、この感覚…

突然のハプニングでキスをしてしまつた恥ずかしさに煽られ続ける

：胸の鼓動

この状況を把握しきれてないのに、戸惑いと欲望がみるみるつむじに膨らんでいく。

瞳がぶつかり合うだけで羞恥心を丸裸にされて

それでも更なる甘い香りを感じ取つて反らせない視線。

私の心をまるごとさらつてしまつズルい眼差し。

でも唇まで奪うなんて、反則…。もつともつと。欲しくなる

「そんな瞳で俺を見つめてんな」

そんな、目 ?

考てる暇も『えてくれない彼にグイッと強く顎を引き寄せられて
今度は唇にカブリつくりよつに力強く、欲望のままに。奪われる

「もつと奥まで欲しいんだる?」

浮いた唇から漏れ彼の強気な吐息、煽られる 甘い願望

『……んつあ、ちょ、んう つ』

「……えろい顔……」

2人の唇が潤つて、私の心の中を覗き見るよつに奥深くまで入ってきて
直接脳を刺激されるから頭の中をカラッポにさせられる。

きつとこの人 キス、すごく巧いんだ…

こんなに夢中にさせるキスをするなんてほんと、反則だよ。

強引に奪つておきながらも、頬を包むのは優しい彼の手
壊れる程胸打つ鼓動をもみ消す吐息に紛れた私の甘い鳴き声
ビル街のど真ん中で何度も何度も重ね合つ唇

私は、熱く。深く。あなたに、奪われる

「……お前、隙だらけだな。よく痴漢に遭うタイプだろ… 気をつけ
るよ?」

『えつ あの…!』

「どうせ此処の社員だろ?… 運が良ければまた相手してやるよ

けれどそのヒトトキは、夢のよつに儚くて

彼は傲慢さたつぱりの一言を残し、何もなかつた素振りで立ち去つていく。

せめて名前と携帯番号位聞くべきだつたんだろうけど現実かも分からないフワフワした気持ちでお腹一杯でそんな余裕は全く無くて初めて暴かれた甘い欲望を抱えたまま、私は暫くその場所から動けずにいた。

全ては、ここから始まつたの

ほんの僅かな出来事、衝撃の走る出会いイタズラな運命が落としていつたもの。それはフラグ。

次の日、迎えたいつもの朝

ベッドから起き上がりつて支度を済ませダイニングチェアに腰を下ろすとテーブルの上にはいつもの様に、和の朝食が用意されていたのだけれど食べて欲しそうな紅鮭を食い入るよつて見つめながら考へてしまつ。

昨日は冷静に考えなかつたけど初めて会つた人と？しかも思い切り街中で？キスしまくつちゃつたんだ！

今思つと、ありえないよねえ…

一夜明けてしまつと、あれは夢だつたんぢゃないかつて氣もする
それでも、今でも脇がじんじんと訴える… 真実味帯びたアツい熱
私もどうかしてたんだけど、未だにあのキスの意味が理解できずには
いる…。

つき合いましょうーって感じでも無かつたし、これからって感じで
もないよね…

たとえ同じ会社の社員でもウチは自社ビルを持つ程の大企業、もつ
会えないだらうし。

でも、「わかりやすい女」つてどうゆう意味だつたんだらう?

「みゆ、早く食べなさいー。遅刻したらすぐお父さんにはねちゃうわ
よー?」

そんな答えの拾えない疑問を吹き飛ばしたのは、お母さんで。

お父さんが社長を務める会社だからって社会に甘えは通用しないと
よく言い聞かされるの。

ちなみに私の勤める部署は、新しいプロジェクトを任せている企
画開発部

兄妹3人揃つて、大学卒業と共にお父さんの会社に入る事なつてい
た。

「タカも昇進したし、みゆも社会人として働くまでに立派に成長し
てくれたし

お母さん、一安心よ」

・タカには桜木家の長男（31歳）

社長であるお父さんは昔から仕事ばかりだったから

小さな頃から、私にとつてはタ力にいがお父さん代わり。長男だけあつて次期後継者・今ではもう専務なの。

「アキも向こうで頑張っているのかしらね…」

：そしてアキは桜木家の次男（28歳）
アキとは年が5歳も離れてるけど、私が昔「ラコン」で呼ばれた程仲
がよかつた。

頑張つて仕事しているのだろうけど、アキ、元気してるのかな

『アキ、ロス支社にいるんだっけー？

中学卒業と同時に留学してそのまま支社に入社しちゃったもんね

：『そうよねえ。たまには帰つて来てくれればいいのに…』

アキは留学してから13年間一度も家に帰つて来てない、たまーに
メールが来る位。

顔見せに位帰つて来ればいいのに 相変わらず冷たいんだ…

そうしてお母さんも私もそれぞれ思いふけついたら…、わー！？

「みゅー！時間ー！」

『あつ 行つて来ますー…』

＊＊＊＊＊

昨夜の余韻に浸る間もなく、ひたすら走り駆け抜ける新宿ビル街
滑り込みセーフで何とか辿り着いた、私のオフィス

『絵里花、奈緒、おはよー！』

近年新設された職場、企画開発部には私と同期の女の子が2人いて。

流行り物が好きでまさに合コン受けしそうな

可愛らしい木村 絵里花。

絵里花よく色々な部の人達との合コン話を持つて来るから
社内では「合コンの女王」とも呼ばれている。

「ねえみゆ～今度広報部と飲む約束したからあ～奈緒と3人で行こうねえ～」

そして絵里花の甘ったるいプリツコロ調に乗った誘いを
向かいのデスクからスパッと断つたのが

高級ブランド物好き、まさにおじさま受けしそうなお姉キャラの岩崎奈緒

「絵里花の人脈網ってどこまで広いのよ？」

私は若いの（男）バスだから。あ～みゆは行くってよ？？」

『奈緒！ 私まだ行くなんて…』

絵里花の用意してくれる合コンはいつも良い人揃い。
入社以来彼氏のできない私にはとても嬉しいお誘いなんだけど

「わあ～い！ 今回も頑張ろ～みゆってキレーなのに男つ気ゼロ
なんだもん。

そのJK並の恋愛思考、変えた方がいいと思うなあ～」

相変わらずその可愛いプリツコロ調でズケズケ心に釘を刺すものだから

毎回快くお返事ができずにいたりする。

でも絵里花の言つとおり…

付き合つた人がいてもいつも本当にこの人の事が好きなのかな?つて考えちゃつて

結局すぐ別れちゃうんだよね…

過去のトラウマってなかなか消えてくれない 本気になるのが、怖い。

…その時なぜかフと思い浮かんだのは、昨日の彼。

もしさまた会える距離にいたら、トラウマも吹き飛ぶ位好きになれるのかな?

彼のあの私を見る目も、キスも 思い出すだけで体が熱くなる…あんな風に瞬間に男の人に惹かれた事は初めてだったからいつも自分の気持ちに自信が持てなかつたから…。

その点、絵里花は恋愛に素直な性格をしていた。

惚れっぽい上に好きになると真っ直ぐで、あつと言つ間にのめり込んでゆく…

その怖いもの知らずな所がちょっとぴり、羨ましい。

ちなみに、奈緒も彼氏がいるみたいだけど

奈緒はあまり自分の事を私達に話してくれない。何か深いワケでもあるのかも…。

そんな、雰囲気も性格も全く違う3人だけ

私たちは入社した時から休みの日も遊びに行くような仲の良い友達だった。

そして、雑談に終止符を打ちに訪れたのは就業時間。

今日は、私が入社して丁度1年が経った日でこの企画開発部に人事部の人に入ってきては、新入社員の紹介をしている。

「ああ来なさい。えー今日から開発部に配属された沢田 亮介君だ」

「へーえ。格好いい顔しちゃってるわー。となると…絵里花を見る」と案の定

「木村絵里花でえす！ジャニーズ系だよね沢田くんてえ 彼女とかいないのぉ？」

やつぱりー！席に座つた沢田くんに早速絵里花が絡み着いていた。

「今いないつスねー」「ええ？ もつたいいないー！かつーいいのにい」

そこですかさず奈緒が絵里花にツッコミを入れ

「いい男見るとすぐ恋しつけて興味津々にがつづくのやめなさいよ、見つとも無い…」

けれど絵里花は動じず、「白慢げに言い放つてみせる。

「だつてえ、いつどこに彼氏候補が転がつてるか分からぬじやあん。

積極的にいかないと損ソソン」

だからその前向きすぎる絵里花に奈緒と私が呆れた顔をしていると少し照れながらも、沢田君がキラキラした目でこんなことを言つから

「俺は、その人以外見えない位の完全燃焼できる相手が欲しいんすよね」

急に何を言い出すの と思いながらも、かつこいい と
私達3人とも一瞬そんなクサいセリフを堂々と言う沢田君に魅せられてしまつた。

時だつた。

「…え～もう一人、紹介します」

え？まだいたの新入社員 てゆうかまだいたの人事部の人
そうしてみんながどよめく中、人事部の人は気分よく話し始める。

「この1年、開発部の主任は不在としていましたが
海外勤務を終えられて本日付けで正式に就任されました」

主任がそろそろ来るとは聞いてたけど、私達の直属の上司があ
どんな人なのかな？

「 失礼します。」

そう期待を胸にドアに向ける視線
そして入ってきた背の高い男の人の姿に、一瞬で目が釘付けにされる。

え … うそ

新主任として紹介されて現れたのは
昨日、街中で熱烈なキスをしたあの彼。

覚えてる 何にも動じないあの瞳

キスをしている時でさえ乱されない自信に満ちたあの姿勢

2度でも偶然が重なれば、運命って呼べるのかな？

妄想に更け出したら、もう人事部の人の話も耳に入らない。

「この方は、暫く海外勤務されていて」

昨日は暗くてハツキリとは見えなかつたつてゆうのもあるけど
こう見ると こんなにキレイな顔した人だつたんだ
なんて私がポーッと彼を見つめていると

「ちょっといい！ あの人お

イケメンアンテナだけは鋭い！

またもや絵里花がすかさず強力ながつつきを見せるものだから
あの人だけはヤメてーつー！

そう心の中で叫びながらまた彼を見ると、視線が出会い…

なのに彼は私の姿に驚いた様子もなく顔色一つ変えずに平然と私を
見ている

ジッと あの切れ長の目で私の目を射抜くかの様に…。

昨日の今日で私を覚えてないってことは無いと思つけど

何でそんな冷静な瞳でいるの… それが余計私の心をやわめかせて
いった。

それもすぐに、違ひざわめきに変わるのに

「 という訳で今日から主任の桜木 アキ君だ。宜しく頼むよ
『 …ま、つて…桜木…アキ …?』
「 ”桜木” つて、もしかして みゆのお兄さんとか? ……みゆ?
?』

呟いた小さな声は震え出し

奈緒の声だつて、今の私の耳には届くはずもない。

* * * * *

昨日の人が、アキ ? うそ、でしょ? ?

あまりに予想外の事実に私はすぐに状況を飲み込む事ができずに
みるみるうちに視界が狭まつていく

「 …大丈夫? みゆ顔真つ青だよ?」
『 うん ちょっと、驚いただけ…』

奈緒が心配そうに私の顔を覗き込んで顔色を伺つものだから
一応の口を動かしてみても、思考の歯車が巧く噛み合わない。

昨日の彼はアキで 今あそここいるのもアキで…
私、アキに恋に墮ちそうになつてたの ? お兄ちゃんの、アキに
? ？

そういえば何となく面影が…。

それよりも何よりも お兄ちゃんとキス つ
アキが帰つて来た事は嬉しい事のはずなのにものすじへ、複雑な気
分…。

出会い恋に落ちそつになつてキスまでしちやつて運命の再会をして
て 実は兄でした……なんて失恋にも程があるよ 。

「 と言つ事で、桜木 みゆ君。

兄妹でやつづらつて事もあるだらうが仕事に励んでくれよ

『 …は、はい…』

ええ、やつづらつてすとも… やつづらつてマックスだよ 。

「 宜しく? ” 桜木 ” 」

さつきと変わらずに私を貫く何も語らないアキのブレない視線
驚く様子もなく毅然と立つているその冷静さ。

その力は、昨夜の「男」でもなく「兄」でもなく…紛れもなく「
上司」

アキは 驚いてないの? それとも、知つてたの…?

私は兄妹と知つた今でも胸は締め付けられたまま ドキドキが、
消えないよ 。

… それでも。

絶望的な失恋の切なさとアキとの関係の氣まずさが喉元をカラカラ
にさせても。

私は喉の奥から一生懸命言葉を発した。

よりしく お願ひします。
”主任”
…

#2 運命のイタズラ -?- -

side アキ

久しぶりの東京だった

辺りを見渡せば箱詰めにされた景色、都會独特的薄汚れた空氣
それは、中学卒業以来ずっとロサンゼルスで生活して来た俺に少々
息苦しいが
それと同時に暖かさに包まれる懐かしさもあった。

あれから13年間日本に帰つて来ていらないんだ
故郷が恋しくなるのも必然だろつ。

無論、その間も家族の事は気になつていたが
時々兄貴がくれるメールを読むと皆元気そうで
俺がいなくても父さんや兄貴に任せておけば大丈夫だ、と思つてい
た。

そもそも、長期留学やロス支社の入社を望んだのは俺自信だ
後悔はしていない。

そうじて、ロスでの仕事も終え、

明日から新宿本社の企画開発部・主任として赴任する事になつた。

よつやく日本で働く、ロスでの経験を存分に活かす事が出来る
そう 俺はビジネスの為に帰国したんだ。

その仕事の打ち合わせも含め

今日はこれから兄貴と食事をする事になつて、
その前に新宿の本社ビルを先に見ておこうと少し寄り道をしていた。

『東京の夜はまだ少し冷えるな…』

等と、高層ビルと共に相当振りの東京をしみじみと肌で感じていた時
歳の割に男慣れしていな、そな綺麗な顔立ちをした女と接触するが…

これを一因惚れと、呼ぶのなら。

「偶然」が「運命」をもたらしたとしか思えない。

俺を見つめる真つ直ぐな瞳に。

戸惑いながらも反らされない微睡みの揺れる瞳に。

何故か懐かしさを超えた愛おしさを感じ、気づけば彼女の唇を奪つ
ていた。

一度唇を合わせると

物欲しげな少女から女の顔に変わっていくサマに悉く欲情が煽られ

その漲る欲望を打ち消す様に、何度も、何度も、キスをした。

いつの間にか、彼女を…離せなくなつていた

今まで女に不自由した事は無い

俺にとって女は居ても居なくとも、どうでもいい存在だった。
寧ろ面倒なだけで女に情や執着心を持つ等あり得ないと、そつ思つ
ていた。

なのに、何故なんだ…

運命だからか？罪の扉を叩いたからか？彼女は俺の心を一瞬でかき乱す

ただの一夜の出来事、そんなの今まで沢山あったじゃないか
俺はどうかしていたのだろうと、別れた後いくらそつ自分に言い聞かせても

この唇に彼女の温もりが残つて 仕方なかつたんだ。

帰国したばかりの俺には連絡手段がまだ無かつたばかりに
もう一度と会えないだろうと思つていただが…こんな運命つてあるんだな

みゆ。

やがて 彼女の事が頭から離れないまま

少し送れて到着した、兄貴との待ち合わせの小料理屋

「よお～久し振りだな、アキ」

相変わらず軽い口調の兄貴も俺も

13年となるとさすがに歳をとつたなと感じた。

「母ちゃんには連絡したのかあ？」

『いや、今夜は遅くなると思ってホテルに部屋取つたんだ。
実家には明日行くつもりだ』

…男兄弟なんてこんなもんだ。

13年も離れてたとは言え、ビジネスと家族の事以外話題が無い。

「みゆもいい女になつたぞー？お前明日からの配属開発部だつたよなあ？」

『みゆも去年からそこにいんだよ』

『妹と一緒に職場か…みゆも変わつたんだろうな
俺の知つてるみゆは小学生までだもんな』

その他に兄貴と話した事と言えば、兄貴が結婚した事や俺の女の話。

「アキお前、今女いねえの？あつちに置いて来たんか？」

『…どの女も続かなくてね。女も恋愛も俺には必要無いよ』

「相変わらずだな お前。

言い寄つてくる女は昔から腐る程いたのにいつも興味無い顔してたしなあ。

本気になれる相手が出来れば、アキも変わるんだろうがな～』

「本気」か…。

女に冷めた情しか向けられない俺には、一生無縁の話だらうと
そう、確信じみた自信に満ち溢れていた……この時は。

『…兄貴は今の奥さんがそうだったのか？』

「 まーな……」

しかし、兄貴にも煮え切らない様子が伺える
兄貴も色々ワケありか

『みゆか…』

けれどそんな事が気にならない程、妹との再開に期待が膨らんでい

た。

あの泣き虫癖は直つただろうか
この歳になつても尚、ブラコンが抜けず俺に執着するのだろうか。
俺が直属の上司になると知つたら みゆ、びっくりすんだろうな…

そんな淡い笑みをも吹き飛ばした…赴任当日。

妹の記憶を辿りながら開発部の扉を開けると
衝撃的な事実が俺を突きつけた。

みゆが…昨日の女 ？マジ、かよ

みゆが驚きを隠せない表情を俺に向いている
顔には出ない様気を張つていたが、俺も十分驚いていた。
まさかあんな形で妹と再会してたとは…と。

妹に手を出してたのか、俺は……。

『よろしくお願ひします』

そう気まずそうに言うみゆを見て いや、妹と分かつた今でも。

俺の心は限りなく揺さぶられていた。

* * * * *

程なくして 自己紹介を終え、一息つく間もなく案内された主任室は
部下が働くオフィスとガラス窓で区切られた広めの個室。
しかし、人事部の佐藤部長が色々と説明をしてくれていても
俺はみゆの事が気になつて仕方がなかつた。

まさかみゆがあそこまで女になつていたとは…妹に欲情して 何やつてんだ、俺は…。

俺の辿つていた妹の記憶は、予想を遥か越えた形で目の前に現れる。

俺の中での妹のみゆは、まだ俺が留学する前の小学生のままだったんだ

いつもあどけない笑顔で寄つて来ては

俺や兄貴が遊んでくれるのを期待の目を輝かせて待つていた。

寝る時には本を読んでやらないといつまでも「山ねる様な甘えたな妹

だつたんだ。

それが あんな女の顔をする様な歳になつたんだよな
経つた年月を考えれば当然の事。

それでも、昨日の「女」のみゆが頭をチラつかせて
離れようとはしてくれない。

昨日の事は忘れて俺は兄として上司として接していくべきなんだろうが
正直気持ちのやり場に困つていた。

しかし、俺達が血の繋がりを持つ兄妹である以上そつ割り切るしかない。

兄妹と言つ事実。

それは、生涯ねじ曲げる事の出来無い……”絶対的な関係”

夜、実家に寄つたらなるべく普通に接しよつ

何事も無かつた様に接すればいい、何も無かつた事にすればいい

兄である俺がそう強くいなければ恐らしく、兄妹の関係諸共こじれていくだろ？。

みゆをこの事で悩ませたくは無い。

それは妹への思いやりか、はたまた己のあらぬ感情を抑える為か。

『お前は、変わったな……みゆ……。』

……主任室と部下の隔たりのガラス窓

何人も社員がいるのにも関わらず、俺にはみゆしか見えていなかつた

あのサラサラした腰までの長いストレートの髪も
あの透き通る様な白い肌も 薄紅色の柔らかな唇も
俺にはもう一度と、触れる事は叶わない。

そう思えば思う程みゆを妹として目に映す事が出来なくなる。

”みゆは妹だ”

唇をかみしめながらそう何度も繰り返し、自分に言い聞かせた。

#3 運命のイタズラ -?- -

sideみゅ

新主任の挨拶を終えたオフィス
通常業務に戻る社員たち

その中で私は当然ながら、全く仕事に身が入らなかつた。

アキが上司で、お兄ちゃんで…

そう頭の中に現実の水玉を落とした数だけ、視線は落ちていく

「みゅう？さつきの新主任てえみゅのお兄さんなのお？」

『うん 2番田の、ね…』

「そあなんだあ！ちょーかつこいいじゃん

専務と言い新主任と言い美形兄弟つて感じー歳いくつ？彼女いるのかなあ？」

だから元気一杯の声が突然湧いて出て来ても
絵里花がアキにどれだけの興味を示していたとしても
曖昧な対応しかできない。

そんな時 絶好のタイミングで絵里花を連れ出してくれたのが奈緒。
きっと俯きがちな私の心中を察してくれたんだろうな
奈緒ってね、人並み外れた洞察力を持つてゐる上にさり気なく気遣い
が出来る人なの
こんな時はしみじみ人間のできのよさを感じる。

それより、どうしよう私…

これからアキと同じ接していいか分からない。

帰国したつてことは、これからは実家で一緒に暮らすつてことになるの？

一緒に職場つてだけでこんなにも同様しているのに

まさかのまさか、四六時中アキと同じ空気を吸つことになるの？

この日は朝の挨拶以来オフィスにアキがいなかつたからまだよかつたけど

明日から私、やつていけるのかな

そんな事を考へているつちにも時は進み 就業時間を越え
大きな不安を抱えたまま、そろり実家に帰宅しすると
予想通り、お母さんがルンルンで台所から顔を出す。

『ただいまーあ』

「おかえりなさーい、みゅー！待つてたのよお 」

だよね、アキが帰つて來たこと聞いたんだろ？な：

13年振りに息子と再会出来るんだもん、嬉しいに決まつてゐ。

なんて、まるで他人」とのよつて「ククク頷いては
上着を脱ぎながらいつものよつて居間に行くと

タジ飯が並べられた食卓には、

アキが座つていて。

何でつ 何でアキがいるのつー？

こんなことは簡単に予想出来ていたのに、この胸は過剰反応をする
氣まずとゆう息苦しさと共に…。

「みゅは会社で会つたらしいじゃない？

アキ急に帰つてくるんだもの。ほんと嬉しいわあ「

お母さんが久し振りに見せる満面の笑み

私だつてあんな事さえなけばお母さんみたいに素直に笑つていられたのに

運命つてほんとい、イタズラ……。

「アキつたら見ない内に随分と紳士になつちやつてー、

お父さんに似たのかしらね~」

……そんな一杯一杯の私に追い打ちをかける絶体絶命のハプニング。

「…あら~お醤油きらしちやつて~」

お母さん買つて来るから先に2人で食べてなさい」

『あ、それなら私が…』

嬉しさで足の浮いているお母さんにストップをかけられず
瞬きをしている間にも外へと出て行つてしまつお母さん

ダイニングに残された…アキと、私。

2人の間に漂つ空気は、兄妹から限りなく遠のいていた。

* * * * *

耳を打つのは、心拍より遅い時計の秒針音
胸を打つのは、宛先不明な鼓動

昨日キスを交わしてしまつた男の人があ
当たり前のようにお兄ちゃんとして家にいる
その違和感に動搖してどうしても体が固つてしまつ。

「定時で上がったんだろう？今まで何処までは歩いてたんだよ
……どうした？座れよ」

程なくして交わる視線 その先は田より匂。

「のままじつとじていたらどうにかなってしまいそうで
顔から田線をずらしてアキの隣に座つたはいいけれど
いくらお兄ちゃんの面影を辿つても
その先は昨日の熱く鋭い眼差しに辿り着く

「のままじつ 意識しきやいけないって思う程
心臓がゆうじことを聞いてくれない。

「のままだと意識してる音、アキに聞こえちゃう…

だからとつあえず田の前のお箸に手をつけてみたのに
なるべく大きな音を立てて握つたのに

「みゆ ？」

真横から響く低音が昨日の熱い吐息と重なつて動搖が手を震わせる

力シャン

あ、お箸が…だめ、もつ耐えられない。

「久し振りのアーチに向、動搖してんだよ」

けれど、動搖丸わかりの私とは裏腹に、隣りから漏れたのは呆れ言
葉に薄い笑み

まるで昨日のことを無こものとする冷静すきのアキの素振り。

アキはどうしてこんなに普通でいられるの…?

昨日の件に触れたくない気持ちは同じだけど、それにしてもスルーしちゃだと思つ…

アキは、何とも思つてないのかな…?

そう思えば思う程、意識しそぎていた私と
何事も無かつたかのようにアッサリしたアキとの態度の差に
だんだん腹が立つてくるよ…

むしり、じんな事でお兄ちゃんに意識してる自分に泣けてくる。

『…13年ぶりなんだからじょつがないでしょ』

「ばーか。」

そう言つてアキは、『飯に目を映しながらも柔らかく笑つていた。

あ 覚えてる アキのこの微妙な笑み。

常に堅い表情しか見せないアキが、ほんの少し心を軽くしてくれる

瞬間

もしかしてアキは兄妹の関係を大事にしたいから
あえてあの事には触れないのかな?
妹の私を大切してくれたから、困らせたくないから、やつしてくれてるの?

うん、昔からそうだった

アキは口数も少ないし極端に素つ気ないけど

目には見えない思いやりが時折顔を出す
だからその、”たまに”の一瞬がとても優しく感じたの。

アキ、変わつてない。私の大好きな、お兄ちゃん。

気まずさ混じりの緊張もほぐれ
相当久しぶりにアキとお母さんと囮む食卓
夕方にいが結婚して出て行つてから寂しがつていた 空の椅子に灯
る暖かさ

やがて 再会を祝う団欒にピリオドを打つたのが、お母さんのお願
いで。

それは一人暮らしを希望しているらしいうアキの部屋が決まるまで
実家で一緒に暮らす とゆづものだった。

長期に渡り家を空けていたことに負い目を感じていたのか
アキはそれに快く承諾。

気まずさの薄れた私にも、少しばかりの嬉しさが芽生えていた。

「 母さんもう寝たのか？」

『うん、横になつてすぐ寝ちゃつたみたい。

アキが帰つてきて相当はしゃいでたもんね？

久しぶりに見たな お母さんあんなに嬉しそうな顔…』

…… そうじてお月様が夜空のてつへんに昇る頃

食事の後片付けをしている私の傍らで

アキは缶ビールを片手にソファーでくつろいでいた。

「私も飲もうかな

「そうか みゆも酒飲める歳か。信じられないな……」

もう13年経つんだよ?私だって成長するって。

それもまたがな

だから冷え冷えのビール缶を片手にアキの横に座つてみると
言葉少なめなアキが少し笑いながら私の頭をフワツと撫でる。

もう私子供じゃないって、アキ

『でもビックリしちゃつた
アキが開発部の主任なんて。

「ああ、出田が松井」貰ひる聲のままの體勢がなんどぞ。

直に常務辺りに異動になるだろうな…」

『……やつぱり。アキもタカにいと同じ、出世街道まつしぐらだね？』

でも。ずっと会ってなくても不思議と普通に話せるもの。

あんな事もあつたけれど、アキと私は間違ひなく兄妹なんだもん
家族つて、血縁の絆つていうやうなものなのかも。

『 そ う だ ！ タ 力 に い に は 会 つ た の ？ 』

「ああ、昨夜会って飯食ったよ」

なんて気が緩み切つていたものだから
無意識に自分から地雷を踏んでしまつていた。

昨夜…つて…キスした前?後?…この話の続き、どうしよ

う！

「…早い時間から飲み過ぎたよ、酔つてあんま覚えてないんだ」

アキ…？

『そ、そっか アキお酒強そうに見えるのにね？』

けれど、何気なく うまい具合に逸れていく話題

アキ 気を回してそう言つてくれたのかな？

そうなんだ…酔つてたって え、まさか昨日のあの時酔つてたの？
ならキスは酔つた勢い？…酔つて単に覚えてないだけとか…？

なんだ、なんだ。

それなら気にすることなんて全く無かつたのかもしない。
アキがそう、言つのならば…。

『ねえアキ、今度タ力にいと3人で飲み行こうよ』

「へえ みゆそんな飲めんのか？」

『タ力にいに鍛えられてるからお酒には自信があるんだあ』

どれだけ離れてても、兄妹は兄妹なんだよね？

それは生涯覆すことのできない 紣

昨夜のハプニングはそつと胸に閉まって

これからで一杯にしていけばいいんだよね 大人の対応を。

そんな脆い志、すぐに砕け散るのに

そして時の流れに身を任せ アキとの安定した新生活、数

日後の朝

出社するなり絵里花がお花畠を背負つて飛んできたと思えば
いきなりの積極的発言にびっくり。

「ねえ、みゆ？！私のお兄さんにアタックしてもいいかなあ？」

『え！ アキに？』

そう言えば絵里花つたら

主任挨拶の時からアキに物凄く食いついていたんだつけ。

そう思い出し納得をしているうちに、2発目の衝撃が胸を叩く

「何かあ 一目惚れしちゃつてえ

ってゆうかねえ！実は主任が来る前の日の夜

会社帰りにすぐそこで主任見かけたんだよねえ

アキが来る前の日つてあの日？“すぐそこ”って会社前？

キスした時の…な、なんですよ…？

『み、見たつて アキを？な、何してたのかな、アキは？』

もしアレを見られていたら そんな動揺から

確実に怪しくドモりながら恐る恐る聞いてみたけれど

「会社の前に立つててねえ～私は通りすがつただけなんだけどねえ

『そ、それだけ？』

「それだけだけど。何かその時ビビーッときちやつたんだよねえ

？』

運良くアレは見られていなかつたみたいで、ホツと胸を撫で下ろす。
だつて、兄妹で なんて世間からしたらたとえキスだけでも
禁忌

「つて、みゅ？ 聞いてる？ ビビーシーだよ？ ビビーシーとお

『んー。私に聞かれてもー

でも絵里花が本気ならいんじやないかな？』

「ほんとお？ ほんといいの！ あたし頑張つちやうよ
あみみゅうあ
彼女とかいないよねえ？ ねえみゅう～？」

うん。あのことはたとえ友達であつても絶対に言えない。

そんなことばかり気にしていたから焦るあまり適当なことを言つてしまつて

その直後にちよつぴり後悔が襲う。

あの日のことはもう私の中でも整理がついてるし
アキとの関係も気まずく無くなつた。

でも 何だらう… 」の胸に広がつてゆくモヤモヤした気持ち。
飽きっぽい絵里花だからなのかな？

アキを取られたくないって気持ちにもなつてる

13年経つた今でもブラコンが抜けていないだけ ならいいけれど

…。

私も気づけない心の水面下で

アキに猛アプローチをかける絵里花の存在が
秘めた想いに拍車をかけていた

「禁断」へと、導く…その。想いに

＊＊＊＊＊

異様な胸のざわつきが向かわせる アキへの視線

部下と間仕切りをされた主任室

ブラインドのほんの隙間から見える上司の顔

アキ、随分頼もしくなったな

昔は肩幅あんなになかった、私を抱き留める腕も胸板も見違える程に逞しくて

妹の私には一生見れなかつたかもしれない男の人の顔があつて会つても全つ然氣づかなかつたもん あ、これ笑えない。

もし兄妹でなかつたら。

私は、きつとあなたを

「 みゅさん?」の書類確認して欲しいんスけど
『 …あーうん 』

その危ない妄想を止めてくれたのは、新入社員の沢田君で。年下だからのかな、この体育会系の口調がとても新鮮で彼のスマイルはいつも爽やかで、自然と心を和ませてくれるの。

「あの みゅさんて彼氏、とか…いるんスか?」
『どしたのイキナリ? 残念ながらいないよー?』

オーラはいつもぽかぽか。話しやすくて 会話もよく弾んで

「ホントっスか！俺、実は みゅせんこー田惣…」
『あつ……』に間違つてゐる。一緒に確認しここにつか

「はー…お願ひ、します…」

きつとアキとは、正反対のタイプ。

「 ねえ奈緒~沢田つちつてゐる

みゅにばーっか仕事の事聞いてるよねえ?」

「何よ、絵里花やきもち?」

ありやど一見でもみゅに惚れでますーって感じじゃない?」

ねえアキ。この時からもつ全ては始まつていたのかな?

「やあつぱつこ?沢田つちはみゅ狙いかあ。

鈍感おどぼけ・みゅは全然氣づいてなわせお~」

「アンタさ、さつき主任がどいつとかみゅに言つてたけど

身の程わきまえなさいよ…」

「ええつーだつて主任モロタイプなんだもおん！絶対モノにしてみせらるよお~」

恋も、友情も、私の知らない所で色々な人の想いが動いていた。

「主任でこも重要だけど みゅのお兄さんなんだからー
お願ひだから、こじれる様な事だけはやめてよね?」

「ええ それは奈緒ちゃんあん！」

あたし知つてゐるんだからあーみゅのお兄さ 専務とお口チソリ会
つてるの 「……」

この時からみんなの歯車が少しずつズレ始めていたことなんて
今の私はまだ、気づく気配すらなかったの。

#3 運命のイタズラ -?-(後書き)

早くひらがなをさせたい ポソッ。

#4 運命のイタズラ -?- -

side アキ

それは、13年振りに実家の敷居を跨いだ時の事

俺の成長を物語つていいのか、記憶よりも数段家が小さく見える
まるで幼少の頃をここで過ごしていた事が夢の様にも思えた。

思い出すな 母の味、子供にも容赦無かつた父の威厳
面倒な事は全て弟の俺に押し付ける兄貴の狡賢さ
そして、まるで金魚のフンの如く俺の後をくつづいていた妹の可愛さ

『ただいま、母さん』

「アキお帰りなさい！ タ力に連絡貰つてビックリしたわあ。

これからは永久に本社勤務なのでしょう？ やつと家族が揃つたのね

』

そんな温かな記憶を振り返りながらもインター ホンを押すと

少し涙を浮かべながら俺を迎えてくれた母さんは

嬉しさ満点の笑みで、おかげが沢山並べられた食卓に俺を座らせる。

母さん、少し背縮んだか？…俺の視点が変わったのか…。

そうして懐かしさを胸に居間を見回している内にもみゆが帰つて来る。

俺が此処に居る事に、明らかに困惑つてている妹が。
意識してんの丸出しで、居間の入り口で不自然に立ち去りしている
…女が。

そんなわかりやすい顔するなよ

普通でいようと決めたのに俺まで釣られそうになるだろ？

ああ顔色変えずにいる事も何も感じていない素振りをする事も

元々感情を表に出す事が苦手な俺にとっては朝飯前。

言動に現れる位動搖する出来事等、今まで皆無と言つていい程俺の人生には無かつた。

だから今日だつてこれからだつてやつていいける。

そう固く志す兄の傍らで

俺の男は、みゆの前でいかに兄貴を演じ切るか 終始それしか頭になかった。

ただでさえ長期間離れて暮らしていたんだ…接し方に戸惑づばかり。

兄貴っぽくするにはどう話を切り出せばいいんだ？

必死だつたんだ、この俺が。

しかしみゆは、俺があの夜の出来事に触れない素振りも

俺が普通に兄貴を演じている事も、みゆなりに良い解釈をした様で母さんが寝付いた頃には俺への態度が普通になつていた。

「アキアキのベッド、シーツ新しいの替えてといたよー？」

『随分と気の利く妹になつたもんだな…』

「うん もう大人だもん」

これで いいんだよな……。

みゆが寝た後も、俺はまだしばらく寝付けずにいた。

寝不足が祟りそうな

翌日の朝

主任室の整理もしなければならない為、みゆが起きる前に家を出た。

そして会社に着いて主任室に入ろうとすると、現在朝6時半。こんな時間からもう電気が付いてるが故に、恐る恐る開発室の扉を開けると

驚かせんなよ 今年の新入社員の沢田が居た。

「主任！おはようございます」

『随分早いな、こんな早くから何してるんだ？』

『いやー昨日飲み過ぎちゃいまして

気づいたら始発だつたんでそのまま来ちゃつたんスよ』

『… そうか』

入社早々呆れた奴だな まあ仕事に支障をきたさなければ俺はそれでいい。

等と完全に沢田を横切ろうとした時… 不意に足を塞き止められる。

「主任とみゆさんが兄妹ってほんとっスか？… 似てないっスね」

“兄妹” そのありふれたワードが、痛く胸に響いたんだ。

『ああ、本当だ。もういいか？沢田、顔でも洗つてこい』

主任室に入り椅子に腰掛けた俺には、どうにもならない希望に囚われる。

もしみゆが、妹でなかつたなら……。

「…主任、失礼して宜しいでしょうか？」

『 どうぞ 』

…やがて気づけば就業時間開始の8時
昨夜寝れなかつたせいか、どうやらウトウトしてしまつていたらし
い。

書類の整理するつもりが、もうそんな時間か…
そう自己嫌悪に陥つてゐる間にも、主任室の扉は開かれる。

「 失礼します」

寝起きの顔からすぐさまビジネス対応のマスクに切り替えた俺
おずおずとしながらも主任室へと足を運ぶ、緊張気味のみゆ
みゆは遠慮がちに、ソレをデスクの上に置く。

「あのね、これお母さんからアキにって。アキの分の家の鍵…」

兄の俺を上司扱いしてくるその辺々しが初々しい
男の俺に意識して恥らつてゐる姿が何ともいじらしく

これは妹への愛情か、否、女への慕情か 。

『 みゆ ～ここでは俺は”主任”だ、そう呼べよ?』

「あ、そう ですよね、すみませんでした」

そんなヤキモキした胸の内を少しばかり見せてしまつたせいか
みゆは顔を赤らめて会釈をして出て行くが

注意しておきながらも、俺も”みゆ”と呼んでたよな…

実家に帰ればみゆが居る、出勤してもみゆが居る
いくら田を背けても、俺にしたら妹のみゆは永遠だ。

消し去りたくも消せない記憶とは、どんな運命のイタズラなのだろうか。

しかし、それからと書つもの本社勤務の日数の浅いせいか会議だらけの日々

良い具合に多忙を強いられた事で気を紛らせていたある日の午後
主任室に訪れたのは、確かみゆの同僚…みゆの親しい友人らしき女
だった。

『何か用か?……名前は』

「木村 絵里花です!えつと 明日の夜なんですが
部署のみんなで主任の歓迎会をしたいんですけど主任、都合はい
かがですか?』

仕事が出来ない上に典型的なブリッコ女か?

しかも集団行動は苦手なんだ、いや面倒臭い…しかし

『いやいい、そんな気を使つな

「いえつ!もうみんなもその気になつちゃつてえ。

主役の主任に来て頂かないとお

……と押され、仕事上これから付き合つていいく部下達の誘いだと思う

断り切れなかつたと書つのが最もりじこ言い訳で。

「あの、主任」

『まだ、何があるのか?』

だからなのか、調子づいた木村さんは
もじもじしながらも言いづらそうに次の話を切り出す。

「主任は 今彼女とかいらっしゃるんですかあ?」

『いや、いなきけど? もう5時過ぎてるから帰つていいよ、お疲れ
様。』

仕事場でプライベートの話をする等、言語道断。
これ以上話がのびるのが面倒でそう突き放し、木村さんを帰らせた
んだ。

愛だの恋だの、本当に女つてそういうの好きだよな…
そんな呆れた溜め息を零しながら。

それでも、俺にも例外があつたんだ。

「…………アキ…しゅに つ タ力にいがね、この後3人でご飯食べ
に行こうって」

何を遠慮しているのか、数センチ開いた主任室の扉から顔半分をチ
ラつかせたみゆ

それは軽くホラー映画に似た演出。
けれどビジネスモードを纏っていた俺の表情は、確実に緩んでいた。

『もう少しで資料が片付きそうなんだ 先に行つてろよ みゆ』

そこに在る情の種類等、考えたくもないが

昔も今も特別なんだ、

みゆだけは。

六六六六六

程無くして向かつた先は、兄貴馴染みの創作ダイニングバー
店に入るなり、遠くから俺を呼ぶ…透き通つた声
それに引き寄せられ席に着くと、酒を飲んでいるせいか
みゆはほんのり頬を赤らめて無邪気に笑っていた。

「よう、アキ！こんな時間まで残業してたのかあ？」

既に始めていた晚餐を意味する皿の数
徳利両手に深く俺を意識する冗談 オヤジかよ

日本酒 それでみゆはこんな顔してんのか…

『兄貴、みゆにあんま飲ますなよ。明日は平日なんだ、仕事に響くだろ』

兄二人に囲まれていて、仕事では見られない妙に甘えた声で酒を含んでいる故にやけに潤んでいる瞳

男心を擥る女の仕草とは、いつの間に事を語りだらう。

「…………？」アーキィ？

『ああ、ひとつあえずビールで』

危ないな 兄貴がいなかつたらまた俺は…

そつ平常心を取り戻し、みゆに触れそつになつていていた手を箸に置く。

「みゆ、お前まだ男できねーのかあ？もう2年近くいねえだらつへ。

家族一のムードメーカーである兄貴は、昔と変わらず妹思い妹のみゆにしたら兄貴は、絶対的な信頼を寄せている相談役

「ん？ 友達に誘われてよく合コンとかは行くんだけどねーなかなか発展しないんだなあ」「レガ…」

そして俺はそんな二人のやり取りを静かに聞いている事が多かつた。
昔から…それは変わらない、変えられない関係。

「俺は知ってるぞー？みゆが断つてるだけなんだろう？

お前も男でも作つてもつと女らしくなれー？もつと色っぽくなあ。

アキもそう思つだろー？

『ああ、そうだな』

だが俺は知つてゐるんだ、兄貴

男の前ではみゆが十分女の顔をすると言つ事を

色気なんかどうでも良くなる位、俺を惑わす瞳を

絶対的な関係をも破壊する威力を兼ね備えた、欲情の薔を

「いーもんいーもん。そのうちね

いのままの私でも良いつて言つてくれるヒーローが現れるんだも

ん

「待て待て、それは漫画の世界だらつーお前は本当可愛いなあみゆ

（

しかし、不思議なもんだな

こんなに時間が空いている兄弟だが
いくら離れていても、いくら会話ができなくても
こうして会って話しているといつの間にかまた元に戻れている
家族とはきっと、そう言うものなんだ。

そう思つて俺の横で笑つてゐるみゆを見ると
俺の中での「家族」と言う言葉に違和感を感じたが
この時の俺はまだその事を、認められずにいた。

「アキは暫く実家住まいだらう? てな事でみゆをよみし
くなーー!」

久し振りの兄弟水入らずでつい長居してしまつたが
時は進み…店を出た時は既に12時を回つた頃
兄貴はそう一言軽く口にし、一人タクシーに乗り去つて行く。

兄貴が飲ませたんだろ…最後まで責任取れよ。

『…みゆお前、酒強いんじやなかつたのか?』
「アキ弱いつて言つたクセにー!」
「こんなに強いと思わなかつたーウソツキーー!」

そう 兄貴と同じペースで日本酒を飲んでいたみゆは案の定
酔っぱらい街道まつじぐら、足を覚束せながら俺の前をフラフラと

歩いている。

あれだけ飲んで潰れない時点で本当に酒には強いらしいが、明らかに飲み過ぎだ

そう仕方なしにみゆの体を支えつつ、タクシーを拾おうとしていると意外にもまたも話題が風を靡かせる

「…ねえ、アキって今カノジョいないのー？」

『 いないけど?』

「ふうーん。ねえ、同じ部署の木村絵里花って知ってる?
絵里花がね? アキに一目惚れしたんだってー! キヤツ

『 へえー』

俺にしたらどうでも良い、友人への気遣いが溜め息を促す

「…アキっていつもそいつなの?」

『 何がだよ?』

「何言つても素つ気ない感じでーいつも眉間にシワよせて話すし
何があつても冷静さ崩しませんて感じするしー」

『 お前、飲み過ぎ。』

「答えになつてなーい! アキ冷たーーい!」

他愛もない話をしているだけでどうしようもなく、男心を撲つてい
く…

子供みたいな奴だな こんなみゆも、可愛いな…。

無邪気に笑う顔も、怒った顔も、困った顔も。

どんなみゆの表情を見ても俺には可愛く見えて仕方がなかつたんだ。

そんな邪心が、俺の歯止めを取つ払つたのかも知れない。

「…あつ キヤアツー！」

よろめいたみゆの体を間一髪で受け止めたこの腕が甘えたなその瞳と出逢ってしまったこの目が

「ア キい、だつ！」して？』

泣き出しそうな程、みゆに傾いていく。

極めて華奢な体に、偶然にもこの手が捉えてしまった 柔らかな胸の感触。

それが余りにも大切に思えて 愛しすぎて。

みゆが酔っている事を良い事に気づけば 柔い胸に置かれた手に力が込もっていた

それはまるで 女に愛撫をする様に。

「…ん あつ…あ、つん 」

そしてこの耳を、欲情を、この上なく煽ったのは

兄の俺には生涯聴く機会もないだろう 甘く濡れた鳴き声。このまま強く激しく みゆが壊れるまで抱いてしまいたいと、何度も迷ったか。

『…お前、感度良すぎだろ 』

…そして氣づかされるんだ、妹へ向ける田でみゆを見れていない自分に…。

そう確信した時には いや、出会った時から全てが手遅れだった。

みゆを抱く手に女への愛しさが生まれていた

：やがて家に帰りみゆを寝かせてからも

みゆを抱いた手がまだ火照り続けていて俺は暫く寝付けなかつた。

分かつているんだ

俺がみゆに女を感じた所で俺らが兄妹だと言つことは紛れもない事実。

それは誰にだつてどうする事も出来ない。

今までも、女は適度にいたがさほど興味も湧かなかつたんだ
ただ、会話と体を重ねるだけの関係で俺は十分満足していた
それ以外はむしろ面倒なだけだつたんだ。

なのに…何でこんな気持ちにさせるのがよりによつて妹なんだよ…。

俺の中でみゆを大事にしたい兄の気持ちと
男の欲望が渦巻いていた。

故に、ある夜の就業時間後

飲み屋で開かれた主任歓迎会にて、固い筈の志が無残にも砕け散る
事になる。

沢田はみゆに氣がある様でアレコレとちよつかいを出していった

みゆの手を握り、髪に触れ みゆにあんな顔をさせている
気になつて仕方がなかつた。

許されないのは確実に俺だが どうしても許せず
見るに見かねて、半ば強引にみゆをその場から連れ出した。

だが、あんな事を言つつもりは無かつた
みゆを困らせたかつた訳じやない、泣かせたかつた訳じやなかつた
んだ

ただ、自分への苛立ちとちつぽけな嫉妬でみゆを傷つけた。
形振り構わずさらけ出してしまつた、男の俺
同時に失くしてしまつた兄の信用

その時以来、みゆは暫く口を利いてくれなくなつた。

#5 破られたタブー -?- -

sideみゅ

久しぶりに兄妹水入らずで飲みに行つた翌朝のこと

俗に”ザル”のタ力にいに付き合つて飲んだのが間違いだったよ
頭ガンガンする…

タ力にいもアキもほんとお酒強いんだから！

…つて。あれ、おかしいな この間アキお酒弱いって言つてたよね？
そんな、この時はなんてことのない疑問を抱えながらも出社を果たす。

少しづつだけど、主任室からアキを覗けることに慣れて来ていって
そして絵里花によるアキの情報収集も、お決まりになつつあった。

「みゅう～おひはよおお

『おはよ、絵里花。何かいー事でもあつたの？』

「よくぞ聞いてくれましたあ！

実はねえ？今日の歓迎会の事で昨日主任と喋つちやつたんだ

でも今朝はいつもも増して、機嫌で、田が一際キラツキラ輝いていて

て

「主任てえ～すんご～おくクールな人なんだねえ そこがまたグウ！」

『……。単に素つ気ないだけだつて。

てゆうより、絵里花そ～ゆうの範囲内だつたつけ？』

「うん範囲外！相手にしてくれないとつまんないもん…でもお

主任は範囲内！」

『え 絵里花、話がよく見えない…』

「だからあ？初めてだけど主任には『キドキ』しつけたの
完璧恋に落ちたつてカンジ？』

『え？ なんだ…』

『ひじよひ 絵里花の不思議なテンションにもはやついていけない…
そんな苦笑いを浮かべていた私を救つてくれたのが

営業スマイルをキランキランに輝かせている沢田君だった。

「みゅわんお早う」わざわざ…」

『おはよー沢田くん』

「みゅわん、今日の主任歓迎会行きますよね？』

『うん？ もうわん』

両者一歩も譲らない輝き対決
けれどやつぱり、絵里花の方が何枚も上手だったよつで。

「沢田ひじよひ みゅしか見えてないト『悪いんだけ』
あたしもいるんだけどなあ～挨拶して欲しいなあ～

「木村さんー居たんスか、すみません…』

……それにしても。

飽きっぽい絵里花にしてはアキに執着してゐるんだよね、本気っぽい
なあ
でもアキ昨日彼女いないつて言つてたし、つまく いつちやうのか
な…。

『お疲れさまでした～！』

今夜は、主任歓迎会

定時を少し過ぎた頃、リクライニングの椅子を皿一杯に倒して伸びをする。

そしてそのままに奈緒と絵里花を探すけれど、姿が見あたらなくて。

代わりに田に飛び込んで来たのは、沢田君だった。

「みゅさん、お疲れさまです！」

岩崎さんと木村さんが先に店行つてゐからつて、みゅさんに伝えてくれつて

『えー！待つててくれてもいいのにー。薄情者ーー。』

「…一緒に行きませんか？」

『うん、行こつか』

沢田君つてこひうみうつとこ氣が利くんだよね

なんて、気持ちがほんわかしていた私は、ひとり呑氣だつたの。

沢田君が今夜に勝負を懸けている、その精一杯の思いも

そんな沢田君に気を利かせて2人にしてくれた友達の思いも…気づかずには。

会社を出た沢田君と私は

少し距離のある飲み屋さんに着くまで、他愛ない話をしながら歩いていた。

でもね、沢田君と並んで歩いてるけど、社員たちの痛い視線を感じるの

沢田君は容姿が格好いいってゆうのもあって

入社早々、女子社員の注目の的だつたらしくつて。

『みんなに羨ましがられちゃうなあ私 沢田君モテモテだから。女子社員に大人気らしいよ?』

「えつ、そなんスか?」

驚いた様に沢田君は目をまんまるくしていたけれど、私より一つ下の割には

今時のやんちゃで遊び好きなイケメン容姿とは想像もつかない位中身は仕事熱心で強い芯のある男の人。

『大学時代もモテたでしょー?』

「そんな事無いつスけど

ただ一人の大事な人に見てもらえないと意味ないんです…』

だからなのかな そう言い切つた沢田君が今まで見た事の無かつた男の顔をしていて、少しどキッとする。

『あつ 口のお店だ!』

「みゆ、遅かつたじゃない?』

奈緒が待ちくたびれたとでもゆつよつて、タバコを吸いながら言つ奈緒。奈緒。置いてつたクセにー!

歓迎会用に予約された飲み屋さん

集まっていた社員は全部で10人位なのだけれど

新設されて間もない部署だからこれがほぼフルメンバー。

私たちが一番最後だつたみたいで、いよいよ歓迎会が始まろうとしていた。

「みゅさん、座りましょう！」

沢田君に手を引つ張られながらも見回す店内、確認してしまつ…アキの存在。

アキは早くも席に着き煙草を吹かしていて

案の定、絵里花はアキの隣の席をちゃっかりキープ。

…やがて、絵里花の乾杯の音頭と共に、宴の席に賑やかさがざつと押し寄せる頃

歓迎会つて言つても、みんなただ飲みたかつただけなんだよなあきつと…

なんて頷きながら、ついつい周りを見渡していた。

絵里花はアキの隣で楽しそうに飲んで一生懸命アキに話しかけていふみたいだけれど

カシスオレンジって…！つもビールガブガブ飲んでるクセに！

流石！合コンの女王…

一方奈緒は、先輩社員達と大人の雰囲気をかもしだして語り合つていた。

流石！オジサマキラー

アキは相変わらず表情も変えないでしれーっと飲んでるし。

こうやって飲む席見るとほんと人の性格出るよなあ。

そんな地味な人間観察を密かに楽しんでいた時

隣に座っている沢田君の長い前髪が、コメカミをサリリと撫でる。

「みゅさん、髪に糸が」

『え、ホント？ 取つて沢田君』

「……取れましたよ！ みゅさんて何か抜けてるところありますよね」

『そ、そつかな？ 初めて言われた…』

「そこがかわいいんスけどね」

：　　！　サラッと よくそんな事が…

沢田君のあまりのストレートさに戸惑い、せりには少し照れてしまつた…次の瞬間

「あの　みゅさん。今度俺とデートしてくれませんか…？」

思いもよらない出来事が、舞い込む

。

デート　？ デートって…

あまりに唐突で率直な沢田君の誘い方に
とりあえずびっくりして直ぐに言葉が出来ないもの
そんな真剣な瞳で覗かれてしまつたら、断るものも断れないよ

。

「ダメ　ですか？」

『うん、いいけど』

「ほんとっスか！？ やつたー！」

されには弾けた声を上げるものだから、思わず今まで嬉しくなつちやう。

本当に　嬉しそうに笑う人… いつ見ると何か可愛いかも

。

「デートかあ… それは大学以来彼氏の居ない私にとつては、久し振りに聞いた響き。

アキとあんな事があつて最近あまり息抜きできなかつたし
沢田君となら楽しいかもね？」

『でも 私でいいの？沢田君ならどんな女の子でもきっと…』
「俺は、みゅさん行きたいいんです。みゅさんじやないと意味が無い」

また 男の人の顔だ… 本当に、なんてストレートな人なんだらう清々しい程に言葉を濁さなくて、真剣さが真つ直ぐに伝わつてくる正直に嬉しいつて思える…

『ありがとう、沢田君。いつにしようつか？』

… そうして、『デートの日時は明後日の日曜日になりその後はどこに行こうかとか、何食べようかとかアレコレ話していった。

一人では絶対に行こうと思わない場所、久しぶりの 男の人と2人きりの『デート』
もちろん緊張もするけれど、どことなく嬉しかつたりする。

「みゅ？！飲んでる？沢田ー ちよいみゅ借りるね！」

… そうして大体の予定が決まった頃だつたかな
奈緒に連れられて、トイレにやつて来たのは…。

トイレに入るなりニンマリした表情を向ける奈緒。酔つてゐるのかな?と思えば…

「…で?沢田は何て?」

相変わらず、鋭い…!

『…デート、して欲しいって…』

「へへえ!沢田もついに行動に出たのね?」

『えついにって?』

「相変わらず鈍感ねーみゆは。

沢田はずつとみゆが好き好きオーラ出してたよ?」

何かこう改めて口に出して言つと恥ずかしいな…
つて、え 全然氣づかなかつた…!

「みゆだけだよ?氣づいてなかつたのは~」

完璧奈緒に心読まれてるよ

『でもまだ会つて全然田にち経つてないし、お友達として遊びに行
くつもり…』

「お友達”つて…。好きになる時つてや 時間とかそんなの関係
ないんじやない?」

恋に落ちる時つて本当に瞬間的なものなんだと思つのよね」

洗面台に腰掛けて足を組み、悩ましそうな顔を浮かべる奈緒。
いつも思つけどほんと大人…奈緒も 今の彼をそんな風に好きにな
つたのかな…

『奈緒の彼は どんな人なの?』

だから今まで何となく聞けなかつた事を思い切つて私は聞いたみたのだけれど

「あのうひ みゆには話すよ」

そう言つた奈緒はとても深刻そうな顔をしていて

とてもこの先を聞ける雰囲気ではなくて

奈緒が話してくれるまで待とつと、この時私は決めたの。

「みゆは沢田の事男としてどうなのよ?」

『どうつて まだわかんないよ… でも、いい人だと思つ』

『 “良い人” つてアンタね もう中学生とかじゃないんだからち
そろそろちやんと恋愛しな?』

わかつてゐ わかつてゐけど…

「ちやんと、男と向き合つなよ、この機会に沢田を真つ直ぐ見てみ
たら?」

好きになるかどうかは別として、何がが変わるんじやない?』

『 そう だよね、私もちやんと誰かを好きになりたい…』

「うん、頑張れ、みゆ」

奈緒の言葉は、一つ一つとても暖かく感じる

だから友達の有難みと、経験者からの暖かいアドバイスを
じんわりと心に刻めていたの。

「……岩崎さん。俺、用事あるから先帰ると皆に云つてくれるか?」

次に起じる、ある衝撃までは。

お店側から設けられた飲み時間は2時間半
今はまだ1時間を少し経過した位
その私たちが話を終えてトイレから出て席に戻りうとした時
アキが壁にもたれ掛かつてそこに立つて、どうやら途中で抜け
出す様子。

今夜の主役なのに なんだ、アキもう帰るんだ

「はい、わかりました。お疲れさ……」

なんて少しばかりの落胆を感じていたのも束の間
奈緒が一礼をしないうちに、アキは私の腕を強引に引っ張つて歩
き出す 。

えつ、え？？？ 帰るつて、私もー？？

『ちよ つと、アキ！？』

アキはこいつを見向きもせずにお店を後にするけれど
お店を出てからも私の手を強く引き無言で歩き続ける
ひたすら前だけを見て、私の問いかけになんて答えようとしてくれ
ない。

そうしてアキに腕を取られたまま結構な距離を歩いたと思う。
この状況に耐えきれなくなつた私はついに立ち止まり
思い切つてアキの手を振り払つと、よつやくアキは足を止めてくれ
た。

『ねえ、アキーちょっと…手、痛い、離して…バツ したの、一
体?』

けれど アキはなぜか怒り口調で。

「お前 沢田と何話してた?」

ん? 沢田君? ?何で? 何で? 沢田君? ?

『べ、別に 仕事の話とか、かな?』

アキも案外鋭いな… 何となく恥ずかしくなつてきた 場合でもなく

「 嘘をつくなよ

アキが怖い顔で私を見下ろしてい
る。何で怒ってるの…、意味わからんこ
よ…

『アキだつてお酒弱いって嘘ついたもん アキに言われたくないも
ん!』

だからあまりに緊迫したこの空氣をどうにか和らげたくて
少し茶化ながら言つてみたものの
なぜなの この重い空氣は和らぐ所がどこどんも悪苦しくなつてい
く。

ましてや私のこの一言が

アキにとんでもない言葉を言わせてしまつ、引き金になつてしまつ
たなんて…。

「じゃあ、実家で飯食った夜、俺が酒が弱いって嘘をつかずにあの日の夜の事を蒸し返せばよかつたのか?」

『……つ”あの夜”つて、ア、キ?』

「ちよつと…アキ 今、何て?」

この話がまさか出てくるとは思わなくて私は驚き、固まるしかなく

『ア、キ?』

一回解き放たれた私たちの間で守られていた禁句タブー
それはは留まる事無く、アキの口でさらに抉られていぐ…

「…知らなかつたとは言え、”兄妹で何度もキスしたよな”。
そう言えばよかつたのか?」

な、んて事を…

何で そんな簡単に言つちやうの? なんで今更になつて…

『 何の、こと?』

何て言い返していいかわからなかつた
分からない振りをしておけばどうにかなるなんて思つてた訳なんか
じゃない
でも、それしか言えなかつた…。

ねえ 今まで私の為に言わないでいてくれてたんじやないの?
兄妹として私を大事に思つて何も無かつた振りしてくれてたんじや
ないの?

そんな戸惑いでよりめく私の体を アキはまた私の腕を強引に引き寄せた。

ア、キ…？

「アニキにキスされて熱くなつたのはお前だり？

…思ひ出せないなり 思ひ出させてやるうか？」

あの時とは違う その眼差しには、何か深いものが宿つていて私の顎を強引に掴んだ手は、溢れる何かで震えている。

少し開いた男の人の口元 だんだんと近づく、少し斜めに傾けたあなたの顔…

ねえ？このまま、また。キス、しちゃうの

？

そんなの、やだ だつてアキ怖い 、何でこんな事…信じられない、ひどいよ

目には涙がこぼれそうな位溜まつているのが自分でもわかる。パンツ

…！

… 気がつくと私は、アキの頬を思いつきり呪いていた。

『アキ 最低だよ…』

ほんとこ、最低だよ……！

瞬きした私の両目からは溜まりに溜まつた涙が一気に流れ出す…

涙を見せた途端に弱まつたアキの手の力

苦味にも似た悲しそうなアキの表情なんて、もう見えていなかつた。

私はアキの腕を振りほどいたその勢いで、アキから離れ去つたのだ

から
。

それからどれ位走り続けたのかな
走つても、走つても、流れ出した涙が止まらなかつた。

ひどい ひどいよアキ…歓迎会から無理矢理アキに連れ出されて
まさかあんな事言われるとは思わなかつたよ 。
あの日の夜から秘めていた事が何の陰りもなくさらけ出された。

アキは何で今更あんなことを持ち出してきたの… ?
走りすぎて?泣き過ぎて?息切れが呼吸を阻む
それでも走るのをやめないのは、早く家で思いつきり泣きたいから。
何で 私が大事なら何であんなこと言つの…
何であんな意地悪にキスしようとしたの…
分からぬことだらけのアキの言動をもみ消すよう^に
やつと辿り着いた部屋のベッドへとダイブした。

『私が幼稚すぎるのかな つ…アキのばかっ

あ』

帰るまでに沢山涙を流しちやつたせいか
不思議ともう溢れ出す程の涙は残つていなかつたけれど
アキ さつきほんと怖かつたな… そう思い出すだけで、ほんのり涙
が滲む。

明日・明後日は土日で会社は定休だけど
家族だもん どうにしても家では顔を合わせなきやいけないんだ
よね 。

守られたはずの兄妹を崩されてしまった今、私はアキとビリ接した
らしいの

#5 破られたタブー -?-(後書き)

相変わらず おお おお。笑。

ここいら辺はまだ元の Story と変わらないかも！？
そのうちまとめて修正入れます

side アキ

あれは歓迎会が行われた夜

怒りより悲しみを帶びたみゆの泣き顔
目に一杯の涙を溜めて俺を見るみゆの傷ついた目
俺の手から簡単に離れて行つたお前の温もり

それが酷い後悔と共に、傷跡の様に俺の記憶に深く刻まれ
今でも尚、忘れる事が出来ない。

一度心に決めた事を俺からほじくり返してビビるんだよ。

どうにかしなければいけないと思つてはいたが
その話をどう切り出して良いか正直戸惑つていた。
あの話題を出したらまたみゆを傷つける様な事を言つてしまつので
はないか

怖かったのも事実だ。

： そう思い悩みつつも、リビングのソファにて手持ち無沙汰で過ご
す休日

昨日・今日は、土・日で会社は定休、みゆも勿論家に居る。
しかし昨日も、飯を食いに部屋から出て来たみゆに軽く声をかけたが
みゆは田を反らしたまま俺を視界に入れようとせず
返す言葉さえも拒否していた。

ましてや今日はずつと部屋から出てこないんだ。

飯もろくに食わずに もつ夕方だぞ？

そうしてコジングからみゆの部屋のドアを『気に掛けつつ
何本目の煙草を吸い終わった頃だらうか…
ラチのあかない冷戦を終わらせる為重い足を動かし、みゆの部屋の
ドアを叩くが

『みゆ ？ いるんだろ？ こつまでやうしてんだよ…』

声を掛けるもみゆの返事は無く、叩いたドアの音だけが耳に残る。
意地でも俺を避け続ける氣かよ…。

すると苛立ちを向けたドアとの間に洗濯カゴを手にした母さんの声
が一筋横切り
追い打ちを掛けるかの如く、俺を搔き乱していく。

「みゆなら会社の人と会つて朝早く出たわよ～？」

『 出たつて、何処に？』

「 わあ？ いーつぱいおめかししてたから、さてはドートかしらね
え～ 』

『 テート、だと…？

誰だ？誰と 、会社の…？

沢田か

？

そう閃いた瞬間に俺の芯から沸々とこみ上げて来ていた。
認めたくはない、この。止めどない気持ちが

沢田はみゆに好意を寄せているだらう事は

オフィスでも一昨日の飲み屋でも見ていて明らかだった。

”みゆは今日沢田と会っている”

確かに事は何も無いが、何故かそう思えて仕方がなく落ち着かない。俺のものでもないのに ましてや、みゆは「妹」だ。妹の男関係に嫉妬する等馬鹿げている。

だが、こんなに嫉妬に狂いそなのは初めてだつたんだ。

早く 帰つて来いよ…

そしてこの不安で揺れ動く心を止めて欲しい。

そう部屋でじつとしている

時計の針の進みの早さが妙に気になり、必要以上に玄関付近の物音に耳を澄ませた。

もう、10時か 。

『……みゆ 遅いな…』

「アキつたら心配性なのねえ。

みゆだつてもう子供じゃないんだから。そんなに心配しなくとも大丈夫よお?』

フフフ、と笑いながら母さんは俺の心配を軽く受け流すが子供じゃない…だから、余計心配なんだ。

「…あら~すゞい雨!

天気予報では雨なんて言つてなかつたのに みゆ、帰り大丈夫かしらね…

『……駅まで迎えに行つてくれるよ』
「何時に帰つてくるかもわからぬわよ？電話してみようかしらね」

俺が迎えに来る事を知ればみゆはまた俺を避けるだらうな

『いや、いいよ。煙草買に行こうと思つてたんだ。出先で俺が連絡取つてみる』

「アキつたら変わらないわね～？」

面倒な顔をしてても結局みゆには過保護なんだから」

過保護ね……。

そう薄い笑みを吐き捨てつつも
みゆの帰りが遅くて居てもたつてられないから俺は
一本の傘を手に家を出る事にし

会つたらきりんと向き合つて話さうと。

俺の気持ちを別にしてもこのままでこる訳にはいかないと。

雨の音しか聞こえない夜道を

揺るがす不安を抱えながらみゆへとひたすら足を進めた。

全てをかき消す様な強く、激しくなる一方の雨。

* * * * *

駅まで来たはいいが、母さんの言つた通り
みゆがいつ帰つてくるか検討もつかないままつい気持ち任せで来て

しまった。

全く終電が出るまで待つ気かよ俺は…

こんな風に当ても無い女を待つた事等今まで一度だって無かつた
例え仕事でも計画性の無い行動は無駄だとさえ考えていたんだ
その頑なに守つて来た思考が
たつた一人の女に、まさかこんなにも容易く覆されるとは…呆れる
にも程がある。

この状況で俺からの電話に出るはずもなく
もしかしたらこの雨ではタクシーで家まで帰るとも考えられると
為す術も無く改札へ向かい、取りあえず駅の屋根がある所で待つて
みようかと

濡れた傘を閉じよつとした

その時だった。

この田に飛び込んで来たのは、改札の奥にぼんやりと視界に映るみ
ゆの姿

内心、本当に会えると思つてなかつたのか、自分の田を一瞬疑つて
しまう程だ。

改札から出たみゆは、雨が降り出していた事に気づいたらしく
雨を降らせている夜空をぼんやり見上げて立つていた。

綺麗だな…

まるで、一人置いてきぼりにされた様な顔をして
雨粒を手のひらで確かめているその姿は
寂しげで、儂くて それでいてとても麗しい。

アイツの為にあんなにめかし込んで こんな時間まで何やつてたん

だよ…

そんな気持ちをぐいと押さえみゆのいる方へと足を進めた

『みゆ』

アキラ 何で？

驚いた顔をしたかと思えば、すぐに俺から田を返らし

『みゆを迎えて来たんだ』

いい！頼んでない？！

みゆは逃げるよ^リに雨が降る中を足早に歩き出しつ^ト行く。

卷之三

氣づけば、我構わず、形振り構わず。

傘を差すのも忘れ、雨の中を濡れながら去りゆくみゆを夢中で追いかけてゐる。

六四

逃がしてなんかやるもんかよ。

六六六六六

バケツをひっくり返した様に降り続いている雨は
まだまだ止む気配を見せない

『無茶すんな、風邪ひくぞ』

「放つといでよー。アキとは話したくないのつーー。」

振り返りもせずに言葉だけ放り投げるみゆは

男に適う筈の無い速度で、俺から離れようと必死になつてゐる。

故に短気な俺は、一向に止まる様子の無いみゆの手首を

後ろから思い切り掴んだんだ。

声を張り上げながら女を追いかける等、俺にしたら 前代未
聞だ。

『……待てつて!!』

「 つ放し、はーなーしーて! 」

『 ムキになつて何やつてんだよお前は。 ずぶ濡れじやないか 』

雨水が滴る程に濡れているみゆの長い髪

可哀想な程に冷え切つている握りしめたみゆの手

「 いいから放つ といてつてばっ! 一人で帰れるから手えつ 放して
よ…つ 」

寒さで微かに掠れたみゆの抵抗の声
言葉を途切れさせる悲しみの涙声

みゆ

『 一昨日は、俺が悪かった。みゆを傷つけるつもりは無かつたんだ…
あの時は俺も色々と苛立つててな、ついあんな事を… 』

俺に手首を捕ま歸つても

無理矢理歩きだそうとしていたその時、みゆの動きがピタッと止ま
る。

「……”つい”って…私は アキ信じたのに
私を大事に思つて言わないでいてくれてるんだって、 そう信じて
たのに…。」

やがて、よつやく振り返り涙田で兄を見つめる妹。

みゆの頬を伝う涙が雨粒に紛れていて
どれ位の涙を流しているのか分からなかつたが
こんなに傷つけ、泣かせても。こんなにも愛しく思えてしまうんだ。

『大事に決まつてんだろ
「じゃあ、何で? 何でんなんこと つ』

だからか、だからなのか。その泣き顔でみゆが田元を歪めた瞬間
押さえ切れなくなつた気持ちが一気に吹き出してしまつっていた。

ポフ

『氣づいたら、この腕の中に みゆを力一杯に押し込めていた。

ああ無意識だった。

でも、抱き締めずにはいられなかつた。 。
この、止めどなく溢れて出てくる衝動を抑える事が出来ずにつ
みゆの体に向かい、注ぎ込んでいた。

こんな言い訳出来ない事を、誤魔化しよつのない事をして
俺はこの後、みゆに何と言い訳する気なのだろうか。

「な、にしてるのアキ 」

『何つて、分からぬのか？お前の体温めてやつてんだけど？』

この雨で冷え切つた俺の腕にすっぽり入るみゆの体の温もり
濡れに濡れていても変わらない、抱き心地柔らかな感触
それらをまだまだ欲しいと、この腕が泣き叫ぶ。

強く、強く。潰れてしまつ位まで抱き締めてやりたいと

「 いっ、いいよ 私は大丈夫だから… 」

『 暴れんな。大人しく抱き締められてる』

またみゆを困らせる事は十分、分かつていたつもりだ。

「 『めんね、私意地張つてた あの日のことも、一昨日のことも全
部忘れるから。」

『 私、大丈夫だから… そんなに寒く、ないし…』

『 忘れられてたまるかよ…。あの日の夜からみゆしか見えなくな
つてたんだ。』

妹と知つた今でも。愛おしくて仕方がない…。

「え、ちょっと 待つて…？」

けれどもう引き返せない、戻らない。兄？妹？それがどうした
ウンザリだ。

そう諦め半分で、腕を振り解こうとするみゆをより力を入れて抱き
締め直した。

「 … つ待つてやめて？アキの言つてる意味がよく、わからないんだ
けど…」

みゆは困惑しながらもただ俺をじっと見つめ
俺は腕の力を緩め、俯いたみゆの顎をグイッと持ち上げ、男を零す。

『……やべに解りせてやる

お前が俺から離れようとなんかするから、こいつなるんだ

#6 破られたタブー -?-(後書き)

♪*お知らせ*♪

#4 運命のイタズラ -? - side アキ
12.24 ちょっとだけえつちに?変更しました!
Storyには全く影響ナシですが
もし、気になるーーな方がいらっしゃいましたらどうぞ

sideみゆ

アキに背を向け続けて、まだ一口とちゅうと
沢田君とのデートまで残り数時間

何着て行こうかな？どんな髪型にして行こう？

そんな事を考えていると自然とアキの事を忘れていた気がして
いかにもデートです！とゆうキメキメの装いになってしまったけれど
朝早くに家を出て沢田君と約束したお昼過ぎまで奈緒とブランチを
する事になった。

「 可愛いマゾー！そのワンピー！随分気合いで入ってるじゃない
？」
「 そう言えば、歓迎会ん時主任と途中で帰つたけど大丈夫だったの
？」

日本に帰つて来て初めての休日なのが
アキつたらずつと家に居るものだから
顔を合わせる気まずさで息苦しくて、早く早く家を出たくて。

『んー？』大丈夫”、つて？』
「主任あん時難しそうな顔してみゆ連れて帰つたりやつから。
何かあつたのかなつて。』

そつ言えば、連れ出された時奈緒も一緒にいたんだつけ

『ん？まあひょつとした兄妹喧嘩 かな…？』

「……そつか、そつか」

「……しても。お兄さん一人、顔は微妙に似てるけどタイプ全然違うのね？」

専務はあんなに人当たり良いのに主任は 最悪。」

『あーうん だ、だよね……』

でも、奈緒が軽く流してくれてほんとよかつた…

いくら奈緒でも兄と妹があんなことをしたなんて、理解を示してくれないだろうし。

奈緒は、同じ年なのに大学時代までの友達とは違つてとても色気があって

見かけも中身も私より全然大人、言うならお姉さんみたいな。いつも人の事ばかり心配して自分の事は誰に話してるんだろう？やつぱり、彼氏かな そう内心で頬を緩ませながらもカフェにいた私たちはご飯を食べて、そして他愛ない話をしばらくしていて。

「みゆそろそろ時間じゃない？」

『あ、もうそんな時間？』

「…ま、程々に頑張つておいで。沢田によるしくね？」

けれど、歓迎会の時には沢田君を猛ブッシュしていったのに最後に私を送り出してくれた言葉つたら、案外素つ気ないもので。

相変わらず私の話を聞いてもらつばかりで

今日も奈緒の恋バナについては語られなかつたけれどカフェを出て奈緒と別れた私は、未知なるデートへと緊張の矛先を向けていた。

鋭い奈緒のことだから、むつ」の時には気がついていたのかな?

既に私の心の中に住んでいた、禁断の匂いに……。

『わあ！すごーい、海だー！』

「私服のみゅさんスゲーかわいい。あ、いつもかわいいいつスけど！」

あー 出たあつ沢田君の必殺！乙女心くすぐるフレーズ！何度もテレる…

沢田君との待ち合わせ場所は、横浜中華街に程近い「石川町駅」おつきな肉まん頬張りながら中華街を歩いて抜け港から客船に乗つて移動しようとしていた。

て、ゆうか…沢田君でこんなにカッコよかつたつけ。

私服姿初めて見たけど、若いからスースイ姿よりカジュアルの方が似合つた

なんてポケーッと見つめている場合ではなく
楽しそうつてゆう軽い気持ちで来ちゃつて申し訳なくなってきた…。
そう控えめにチラッと沢田君を見ると、あつせり二口つと返されてしまつ。

「喜んでくれて嬉しいです。やっぱり、好きつス」

『海好きなの？なかなか見れないもんねえ』

「やーゆうひょつと抜けたとこも、 好きつス…」

船上を絶え間なく優しく包みこむ風

それに紛れることなく真っ直ぐ心に届いてしまった、沢田君の純情

えつ…私の、」と…? 何で、この人つて
フイにそーゆう事言つちゃうのつ
てゆうかサラリと言えちゃうのつ

楽しそうだからとか、アキの事考えたくないからとか
不純な動機でここに居る自分が恥ずかしくなつてくる

私は、今日本当に来ちゃつてよかつたのかな?

沢田君をちゃんと男の人として見なきゃいけないんだよね?

* * * * *

船上を取り巻く大海原に、逸らしたくても目を逸らせない眩しい太陽

『沢田君は、どうして私なの? まだ会つてからそんな経つてないな
あつて』

こんな大自然に触れていると、いつもより心が大きくなつた気がして
どんな聞きづらい事でも聞ける気がして、口からフイに出でいた。

「入社日が初めてじゃないんスよ、みゅさんになつたの」
『うそつ! そうだったのー?』

…忘れてるとか、最低だ私…

「みゅさんが覚えてないのも無理ないつスよ

去年の会社説明会の時に一言一言、話しただけなんです」

会社説明会…もしかしてタ力にいに頼まれた時のかな?

「俺の、一田惚れでした。

見かけもタイプだつたんですけど

新入社員でも無い俺らにも優しく微笑みかけてくれたみゅさんの

笑つた顔が

ずっと忘れられなくて、初めて会つた人なのにスゲー好きだなつて。

もつとこの人を知りたいと思ってこの会社に就職決めたんです

一田惚れ かあ…面と向かつて言われたの初めてだ嬉しいよね、やつぱり

…つて、え…入社動機が不純すぎるよ沢田君…!

「でも部署まで一緒になれるとは思つていませんでした。

入社したら、会社中探すつもりでいたんで」

そつか そんな前から気にかけてくれてたんだ…

『嬉しいな ありがとうね』

「いやそんな風に言わると…」

沢田君は照れた顔をして自分の髪をくしゃつと/or>しては

「少し早いけど、飯食い行きましょうかっ!」

照れ隠しをするように

沢田君は体の向きをかえて歩き出していく。

ひしひしと肌にまで伝づ、本氣
眩しくて眩しそぎるストレートな愛情

応えてあげたいと、素直にそう思えるのに…
私、沢田君を 好きに、なれるのかな
?

やがて じ飯とお酒を堪能した私達が最後に向かったのは、夜の遊園地。

『わあ！観覧車のイルミネーションキラーだねえ！』

よべでラマとかに出てくる

おつきな観覧車が遊園地全体を鮮やかに彩っていた。

「乗りますか！」

『うんうん…』

あの頂上から見たら夜景もつと奇麗だろ？なんてうっかりして
いたけれど

観覧車つてアレだよね、カッフル御用達の…。

こんな真っ暗で狭いとこに2人きりって ちょっと、緊張…

今の私にはまだ、彼への気持ちが好きとかゆう感情には届かなくて
そう、言つなら今は気の合う友達つて感じなのかもと…きっと思い
始めていた。

だからね キミのその真剣な気持ちから
なるべく目を背けていたかったのかもしれない。

観覧車内、目の前で夜景を見て無邪気に笑っている沢田君の傍らでこの軽い雰囲気のまま一周してくれたらいいって、私はのんきに思つていたんだ。

『今日ほんと楽しかつたあ！ありがとうね、沢田君』

でも…沢田君はやうはさせてくれなくて向かい側に座つた沢田君から伸びて来た手は、私の手を取つてそつと、握る。

沢田、君 ??

景色から皿を移すと、そこには少し怖いくらいに切ない表情

すると途端に握られた手を引っ張られて ハツと氣づけば前に前に身を乗り出していた沢田君の唇が、すぐそこまで迫つて来ていて

不意に唇が…重なりそつ、に…

『 やあっ！待つて！沢田君っ！』

だから私は、無意識に顔を背けていた。

「すみません、強引に…

でも…ひどもしないとみゆさん俺の事男と意識してくれないでしょ？』

けれど、その真剣な眼差しが見透かしているのは確かに私の心でそれでも、ドキドキかバクバクでこの胸は鳴り続けていて

でも、確かに今。沢田君を男なんだと、

感じてしまった。

＊＊＊＊＊

『…『めん、ね？沢田君…』』

そだよね、沢田君の気持ち知つておきながら、私つてば
こうなる事は分かつていたはず…

「いえ俺、焦り過ぎましたよね」

そう言つて笑いながらも握り合わせていた手の力は、この上なく強
く痛く

「俺は、みゅさん好きです。会つて話して、前よりもっと好きになつました」

言葉を紡ぐよりも目を会わせ、視線よりも一気に貫く”好き”に
改めて愛の重みを感じさせられてしまつた。

どうしよう、何で答えればいいの…

『私…』

「本当は、今日デートしてくれただけでスゲー嬉しいんですけど
だから今は 何も言わなくていいっス
でも俺、いつか絶対みゅさんを振り向かせてみせますからー！」

…なのに最後に私の手を包んでいたのは、全てを見据えた男の人の
優しさで。

そうゆう人だからこそ、ちゃんと答えを出せなきゃいけないんだって
そり、自然と思えた…。

ある意味のホツとを抱えた帰路

私は電車に揺られながらも、今日の事を思い巡らせてみる。

それにも…意外と強引なんだな、沢田君で。
会つてそんな間もないのにいきなりキスつて
思わず拒んじゃつたじゃない…キスなんてできないよ

会つて、間もないキス…か…

そりゃ…アキのキスは、拒まなかつたな。

あの時はお兄ちゃんだつて知らなかつたから初めて会つた人同然の
人だつたのに
キスをどうして拒まなかつたんだろ…。

奈緒の言つ通り、恋には時間も理由も、要らないんだろうな。

つて！何かこれじゃまるでアキに恋してるみたいじゃない！
ナイナイ！兄妹だし、しかも私どつても怒つてるんだからつ！

…そうブルブル首を振りながら降り立つた駅

そこで待ち受けていたのは、急に降り出したものすごい雨と

アキだつた…。

そこは 激しい雨が帰り道を阻んでいた、家の最寄り駅。

ザアザアと降り注ぐ雨は止む気配もなく
家まで大した距離はないけど傘なしではとても無理そう。

だからたまには贅沢しちゃおうかな、と
タクシー乗り場の魅力に引き寄せられて足が動いた時

斜め後ろからの声に耳を奪われる

振り返ると、…そこには2本の傘を片手に持つアキの姿で。

”迎えに来てくれたんだ！”

そう和みそうになつた時に、一昨日の出来事が頭を駆け巡り
後はに引けないと、雨の中をアキから体を背けて足早に歩き出しつ
いた。

「 みゅーーー」

このままじゃいけないって、いくら逃げた所で帰る場所は一緒なの
について

心ではそう解つていても、何でだろうね

一回意地になるとどこでやめていいか分からなくなつたりやつ。

途切れ途切れに背中を刺す、雨にもかき消されないアキの声
普段、沈着冷静なお兄ちゃんが声を上げて雨の中人を追いかけてい
るなんて

その性格から言つて想像もできない姿。

どんなに一生懸命走つても走つても
足のコンパスの差は、私を追い詰めていく

後ろからグッと強く手首を掴まれ、あつたり捕まつてしまつ自分が
情けない

こんなじしや降りの雨の中、意地張つてる自分が幼稚に思える
背中から聞こえるアキの声に不思議と、泣けてくる…

アキはこんなに必死になつて兄妹の仲を繋げようとしてくれてること
私は後ろを向いてばつかりだね。

だからちゃんと話さないとと、2日振りに会わせた視線
アキも持つた傘もささず雨に濡れてい、びしょ濡れになつた兄妹

けれど振り返つて後悔したんだよ

アキのいつにない真剣な眼差しに、私はあの日のようになつた

心を奪われそうになるなるから
。

* * * * *

切なさにも似た苦しそうな表情を浮かべるアキ。

泣きじやくりながらも

やがてその逞しい両手に一気に
抱き寄せられる。

フワッと体が宙に浮く感覚もなくて

戸惑つている暇もない位の一瞬の出来事だった。

ガツチリとしたアキの腕はとても力強くて、拒む隙さえなくて

れなくて

これだけ冷たい雨でずぶ濡れになつているのに

アキの腕の中は無性に温かく感じる。

何で私は今、アキに抱きしめられてるんだろう…
相変わらずアキの考てる事は私には理解出来ない。

でももつと、理解出来ない衝撃が降り注いだんだ

「 好きなんだ みゅ…」

好き つて…?

思わず聞き返しあつになつてしまつ位に、疑問が浮かび上がるの
セリフ。

『んつと それは妹に溺愛してゐてゆつ 』

「お前な 妹に”好き”とかわざわざ言つ兄貴がいるかよ」

半分呆れた声にいつもよつ数段と鋭い切れ長の目

『そ、そつかー妹に溺愛とか兄としては恥ずかしいよねー』

「みゅ? いい加減にしろよ?」

どうしよう 何かアキ怖い

『だつて、それは』

それはきっと。私たち兄妹には似つかわしくないセリフ

「もう一度言つてやるから よく聞いてる」

…なのにあなたは。その強気な大きな片手でガシッと私の首を掴み

そして吐息のかかる距離まで引き寄せられると
やがて放つの 禁じられたラブーを。それでいて甘い響きを……。

「 お前が好きなんだ」

アキの瞳にガツチリと視線を固められて
疑う言葉も出てこない程の吐息に、もう釘付け。

私は 今、お兄ちゃんに愛の告白を。それでいる

アキの顔がだんだん迫ってきて唇が、ゆっくりと。重なった…

雨水に濡れたアキの唇は重なり合つとなぜかとても温かくて
唇から熱さが体中をあつためていく感覚さえする。

だからかな？普段ぶつきらぼうなアキからは考えられない位の
唇から伝わる優しい温もりに何故か余計に涙が出そうになつたけれど
アキの唇がゆっくりと離れた時我に返つたようにハツとする。

好き アキが、誰を…？私、を…？

アキの言葉の重大さに改めて気づかされて

『えつとーそれは…』

けれど無意識に胸のドキドキが高鳴つて…

『好きって ちょ、アキ？私たち、兄妹なんだよ？』
「…あのは、当たり前な事言つてんな 』

本気なの アキ…？

そうゆう視線を向けてみても私が恥ずかしくなる位
アキは目を反らそうとしてくれないものだから
私も見入るようじっと、ただアキを見つめる事しかできない。

「…それでも、もう俺にはみゆしか 見えないんだ…」

そんな田で、見ないでよ…急にそんなこと言わないで
雨に降られている感覚なんてどうでもよくなつてしまつ。

涙をぬぐい取る様に濡れた私の頬を指で撫で始めたお兄ちゃんの指
それは、いつの間にか私の唇を撫でていて…気がつくと…

『…つは…うん…』

アキの熱い気持ちがまるいと流れ込んでくるみゆな
とても深く、情熱的なキスが、舞つていた…

「みーゅ 絡めて?」
奥まで奪わせり

私が受け止めるのがやつとな位の熱い、熱い。キスが…。

アキが顔を傾かせる度に雨粒が2人の唇を潤していく
それをお互い味わうよつて、深く。深く…。

まだ 私は、アキのキスを 拒めない…。

「…こんなとこたら風邪引くな 帰りつ、みゆ…」

『うん…』

それから家に着くまでアキは何も口にしなくて
だから私も、そんなアキの後ろを
黙つてついて歩いていくことしかできなかつた
。

#7 イトしい温もつ - ? - (後書き)

「めんなさい。まだひやつはー！ 汗
数日中に修正かけます。」

#8 イトしい温もり -?- -

side アキ

大雨に降られたカラダ、禁じられた欲望が濡れた今夜

みゆと共に家に帰った後、先にみゆを風呂に入らせ

先に着替えを済ませた俺は、居間で煙草を吹かしながら考えていた。
後先考えない衝動的な行動だったとは言え、もう 限界だ…。

一度はアキを演じようと試みたが
みゆを近くに感じるだけで普段冷静な俺が簡単に崩れてしまう程の
溢れんばかりの想いを抱えたまま兄妹をやつていける自信は、さら
さら無い。

「めんな、みゆ…

「…………アキ お風呂いいよ」

『あ、ああ』

でもな、お前も悪い。

風呂上りは決まって薄手のキャミソールに短パン姿
兄への表情を向けつつも、その瞳はどこか揺れている。

そんなに意識してんなら

何でこんな無防備な格好して出てくんんだよ…

本当に 男つてもんをわかつてない奴だな…。

「あの さつきのつて…」

その上、緊張で押し潰されそうな震えた声を聞いていると戸惑うばかりに泣き出しそうな表情を見ているとその可愛さを、この小さな体を、壊してしまいたくなる。

触れて 亂して 滅茶苦茶に。

『…本気だ。もう、後には引けないんだ。』

「でもっ、でも私たけ…」

「家で話すのはよだつ。明日は余社だ、早く寝れ。

ああ、みゆ？沢田には……いやいい、お休み。』

だが、頬に手を掛けただけで罪悪感が胸を締め付けた為に震わせた拳をそつと収め、自分を抑えながら風呂へ向かった。

どっち道、この家にはもう居れない。

このまま一緒にいれば

俺はいつかみゆをこの手にかけてしまうだろう。

早く部屋を借りようつ…みゆに手が届かない所に、妹に手を出してしまう前に。

しかし…あんなに簡単にキスされやがって…。

俺と同じ様に沢田にもされてたのかもしれないと思つといてもたつてもいられない気持ちが押し寄せ

渦巻く嫉妬と焦りをかき消すかの様に、熱いシャワーを頭から思いつきり浴びた。

* * * * *

「おはよー!」

その翌朝の事。

食卓に現れたみゆは寝不足な顔をぶる下げ
虚ろな瞳で俺をチラチラと盗み見をしている。
どんな事であれ、俺の事を考えて寝れなかつたんだと思つて
みゆを独り占めした気分になり、…嬉しかつた。

『一緒に出るか、みゆ』

「う、ん……」

だからなのだろうか。そのトキを少しでも感じたい気持ちになり出
社を共にしたが
家の門を出た途端意外にもみゆが必死に口を開き

「あのね、私考えてみたんだけど
アキがつと錯覚してるんじゃないかなつて思つて」

『錯覚？』

「私たち、あんな 再会しちゃつたでしょ？」

だから、その…好きだつて思ひこぶつやつたつてゆうか
きつと アキが好きだつて言つてゐるのほ恋愛感情とかそんなんじや
なくて

えつと だからね…』

そこまで言い終わると、曇げに俯いた。
俺の気持ちを認めたくないと、そつそつといふ様に聞こえる。

『みゆは、そつそつ事にしたいのか？』

「だつて…兄妹なんだよ…？そんなの、変だよ…！」

アキは、どうかしちゃってるだけなんだよっ…』

『そりだつたら わかつてあんな事、しないだろ…』

そうだな どうかしてるよ俺は…己の気持ちながらも変だと想つてしまゆの言つてる事は、常識的に言えば何一つ間違つてない。だが、急に大人しくなつたみゆのその物憂げな瞳を見る度、こつ想つわざにはいられない。

やうやつへ、俺の事で頭が一杯になればいいと。

この想いの行き止まりが来るまで

俺はこりこりして走り続ける事になるのだろうか…。

* * * * *

そんな俺の歪みゆく心に追い風を吹かせたのは
何も知らずして俺に踏み込む、兄貴だつたんだ。

仕事に身が入らず、行く宛のない想いを携えていた時
一息つきにやつて来た社内の唯一の喫煙所に、聞き慣れた声が降り
注ぐ。

「よつ、アキ！ 喫煙者も追いやられるばかりだよなあ。」

次期後継者とだけあり、色々と悩みは尽きないのだろうが
どんな時も陽気でいられるその性格が羨ましい位だ。

「……………おい、アキ？」

『ああ、悪い、何だつけ？』

「おこおこおい 珍しいな、ボーッとして何か考え方か？」

禁煙所内の自販機引き出しがから珈琲を2本取り出しつゝは
1本をこちらへ向けて放り投げる専務は
こんな俺を珍しがり、茶化していた…のも束の間で

「「Jリーチの仕事にはまだ慣れないか?」

『いや、ロスよかやりやすいよ』

「なら何なんだ? そうかそうか…女だらけ…」

『……あ…』

そう答えた俺の言葉に、珍より極上の驚を向ける。

「…ドンピシャか…日本で女できたのか? 見かけによりず半が早え
なさい!」

『一方通行だけどな』

「やつかそつか…アキが女の事で悩むとはなあ…」

本当だよな、俺が女の事でこんな真剣になるとはな…。

兄貴には出張でロスに赴いた時、何度か当時の女に会わせた事があり
ある程度の俺の女関係と女癖を兄貴は知っていたんだ。

「アキが落とせない女なんていんのか…?」

『なんだよそれ…』

しかしまるで俺が百戦錬磨の男の様に言つ兄貴の言葉には、少し吹
いた。

『あいつの前だと冷静じやいれなくなるんだ』

『女に固執しないお前がなあ…今回は、本気つて訳か…』

しかし、お前をそんな本気にさせる女つてどんな女だよ?』

『そつだな 男慣れしてなくて、それで……』

兄貴の言つ通り、こんな想いは初めてだつた
みゆを思い浮かべると心が満たされる様な氣さえする。
いつ何時もこの手に納めておきたくて、俺を見つめていて欲しくて
なれるものならば、俺が。お前に全てになりたくて。

「アキお前、そんな優しい顔もできんのな。」

『何だよ 俺が冷血人間だとでも言いたいのか?』

「違つて言えるかー?」

確かに人には無愛想とよく言われるが
それはただ単に万事に興味を持てないだけで。
そう、”俺”とは、そう言つ生き物だった筈なんだ。

「その子とは つまくいきさつはないのか?」

『ああ 俺達に未来は、無い……』

「おいおい、随分大げさだなあー生きてさえすりやどつにかなんだ
るー』

兄貴は何も知らず笑つているが
常識的に考えればこの俺の気持ちは禁じられているもので
俺がそれにどんなに興味を示そつが、果て無き平行線を辿る運命に
ある。

「何かわからんけど色々抱え込んでそだなー?
でもな、アキ。愛した女はいつまでも自分の近くに居てくれね
えんだ。」

「手遅れにならないうちに、好きなら何とかしろよー?」

そんな俺の心中を察したのか

渋い顔をしたと思えば、頬もしくも兄貴らしい事を言つてくれた訳だが

その女が誰かを知れば、こいつもこくまい。

『……ああ、サンキュー、兄貴。』

そうして 兄貴が喫煙所から去った後
もう一本煙草を吸おうとすると…何だ 無性に頭が重く感じ
想う事もえ罪だと言わんばかりに、頭痛が俺を覆い尽くす。
故に柄にもなく考え過ぎたかと、取り出した煙草をしまい
気持ちを切り替え職場に戻る足を急がせていた……時

「……………」

良くも悪くも、この禁断に荒波を立てる一人の女に呼び止められた。

そこにはこのプリツコの通り、みゆの同僚の木村さん。
”仕事の相談があるから今夜飲みに行かないか”と言つ
何とも無礼極まりない、面倒な誘いだつた訳だが
断じて誘いに乗らなかつた俺を、木村さんはある一言で俺の顎を頷
かせた。

「んつとお、そうつ！みゆの事もあつてえ……」

『みゆが……どうかしたのか？』

みゆに何かが、あつたのだろうか

？

「それも含めてえ仕事終わった後少しお話できませんか？」

そんな訳で、仕事後会う約束をしてしまったが、勿論気が乗らない。別に嫌いなタイプではないが
みゆと出合ってしまった以上、どの女もどうでもいい…。

夕は暮れ、時は訪れ…待ち合わせのバー・ラウンジ

木村さんの相手が面倒な上に、頭痛は治まらず体も妙にダルい。
それ故にみゆの話だけを聞き出し早めに切り上げて帰ろうと取り敢
えず

昼間より一段と化粧の濃くなつた木村さんの横に腰掛ける。

『 で？飯は？』

「今までみゆ達といてえ食べてきましたあ」

『 そりか…』

『 …で？話つて？』

「せつかちなんですねえ主任つてその為に來たつて感じじゃないで
すかあ
『 そりだけど？』

とこりが何を期待してたんだこの女は…

「みゆの言ったとおりだなあ」

『へえ…みゆが何て?』

『アキは素つ気ない』ってえー!彼女にもそうなのかなあ?

あたしい、もつとお、主任の事色々知りたいんですねう

『は?何でだよ…』

俺はこんなくだらない話をしに来た訳では…

「それをあたしに言わせるんですかあ?」

主任ってえ女心わかつてないなあーー

ところがしまつた、俺とした事が…

そっちの方向には持つて行きたくなかつたのだが

気づけば、木村さんが横から上田遣いで俺を覗き込む様に見ている。

「今日はあ飲んじやおつかなあ」

更にはさり気なく木村さんは俺の肩にもたれ掛かつて来る始末。参つたな…。こんな雰囲気のある場所で会うべきじやなかつたか

『そうすればどんな男でも落とせると思つてゐるのか?』

…しかも、だ。一向にみゆの話になる気配もない為後悔に後悔を募らせつつも、この際徹底的に面倒臭さを態度に出してやろうと思い

肩に乗つた木村さんの頭を俺はそつと手で戻し

「主任てえ、会社の外でも驚く程冷たい男なんですねえ」

『よく言われるよ』

『あたしに、はつかり言つわけひつとも

今まで狙つた男を落とせなかつたことつてないんですよ』

俺はウイスキーの入つたグラスをつまらなそつに回しながら
木村さんの武勇伝に適当に相槌を打つていた。

「誘つたら乗つてくる男ばーつか。

でももうそづゅうの飽きけやつたんですよねえ」

だがそんな中、少し酒を食らつただけで頭が朦朧として来る訳で。

「私い、主任の事が好きになつちゃつたみたいです

『……。俺が釣れないから

単に自分のプライドが許せないだけなんぢやないのか

「ううーんそれも、あるかなあ。

でも、純粹に主任が好きだつて氣づこひやつたんです!』

木村さんお得意のブリッヂ言葉が削ぎ落とされていた事に気づいた
時には
話半分も耳に入つていなかつただらつ。

『なら俺のどこが好きんだ?俺は冷たいんだり?』

「冷たいけど それも含めて全部ですつ!』

呆れた女だな その文句はこれといつて特に好きな所が
浮かばない時にとりあえず使う言葉だらうが。
だが、俺自身の事を思つとそつでも無い気がしてきた。

みゆの何に惹かれたかと聞かれれば、これと言つた文句が出て来な

い。

みゆなら何でもいい、それがみゆでなければ好きにならなかつた
…それだけの事。

それはみゆだから…全部…か…これ以上の言葉はないつて事か？

『君は俺に何を望んでる？』

俺は みゆに何を望んで…
木村さんと話していくとも、いくら意識が薄れていても
みゆが、みゆに、俺の頭の中はそんな事で占められ

「そりやあ、好きになつた人には
好きになつて欲しきつてみゆのが普通じやないですか？」

色田を使って誘惑してきたと思えば
こつしてあつけらかんと素直に気持ちをぶつけてくる女を前に
俺はこんな事しか考えていなかつた。

”みゆが俺を好きになる”……？

そんな事はあり得ない…いや、あつてはイケナイんだ。
けれどもし、みゆがの心が手に入つたならば、俺は

「…主任っ？大丈夫ですか？顔色悪いですよ？
熱あるんじやないですか？ならならびっかで休みましょうよお

それにも、”じつか”……この女は全く…。

そう悩ましげに額を落とした矢先、重い頭がガクンとしなだれる。

ああ今思えば、あの雨にやられた、か…？

『そんなつもりは無い。悪い、今日は帰るよ』

「そう言わると思つてましたあ。タクシー拾ひの手伝いますう

そつして結局、みゆの話とやらが聞けず終いになつた訳だが
面倒に追い打ちを掛けた体調の悪さを言い訳にし

店を出た俺は、建物の下で車を拾ひ

がしかし。

『家は近いのか？気をつけて帰…』

「大丈夫でーす！一緒に行きますからあ

は…？

俺が弱つているのを良い事に、気がつくと木村さんは俺と一緒に車
に乗り込んでは

徐ろにキラキラの口テ口テの携帯を出し
いそいそと電話をかけ始めていた。

「…みゆう？実はねえ主任が

体調が悪くなつちやつたみたいでねえ、今から『心配や』…

その相手は みゆ ？

木村さんの携帯電話からかすかにみゆの声が漏れて聞こえてくる

みゆ、みゆに 会いたい…

その想いだけが強く残る中、淡い兄妹の記憶と共に意識が遠のいて
いった…。

#8 イトしい温もり -? - (後書き)

時間がなくて全然修正できていませんが。笑
とりま。進めてゆきたいと思います

読んで下さっている方々、心からありがとうございます
ゆるり～禁断へと墮としますね
次回 side みゆはそんな重くないので、近々ゆきます*

#9 イトしい温もり -?- -

sideみゆ

遡ること 半日

雨水に洗い流された、晴天の翌日
どしゃぶりの雨にかき消されてしまつたような、アキの皆田

昨夜からアキとちゃんとした話が出来ていないまま出社した私は
朝のお茶を煎れに給湯室に来ていた。

アキ 昨日言つてたこと、ほんとに本気なのかな…

分かつっていた アキはきっとあんな嘘をつかない。

私は何をこんなに戸惑つてるの?…またキス、しちやつたから?

アキに触れられた唇を指でなぞると、ぽうっと顔が熱くなつていいく…

そんな心此処にあらざな状態だったものだから

ツルツと滑つたお茶碗は私の手から抜け、地面を目掛けてダイブしてしまつた。

ガ、シャツン!

見るにも無残に散つた、カタチ様々なカケラたち。

収まつていたはずのものがバラバラに散らんとしている、…兄と妹のカンケイ。

アキの気持ちを無視したなら、拒んだなら…

兄妹のカンケイさえ粉々になつてしまふかもしけない…。

「この時なぜか、それだけは確かに思えた。

「…ほんと危なつかしいっスね、みゅせんは…」

そうしてこるうちにも、ぼやけた視界を遮ったのはスウッと伸びて来た男の人の手。

散らばった破片を一つ一つ丁寧に拾ってくれてこる姿には程まされだけれど

『沢田君…ありがと…』

そうだ、アキだけじゃない、昨日沢田君にも告白されたんだった。なんちね思い出すと急に恥ずかしくなってきて

条件反射で沢田君と触れそうになつた手をスッと引っ込めていた。

「そんなに意識されると…」

『あ、違うのつ「めん…』

…ダメ、普通でなんていれるワケないよ

「いえ、男として意識して欲しいつったのは俺ですから
ただ その… その仕草が可愛すぎてソソられるつつか」

「…そんなことから、もつと恥ずかしくなつてきりやつ
たよ…つ…」

沢田君も、アキも。方法は違うけど2人の想いは直接私の心に訴えてくる。

そして私はじりじりも、曖昧な態度しか取れていない。

「みゅせん、顔真っ赤！」

『さつわだ君のせいでしょう!』

なのに、アハハハと無邪気に笑う沢田君を見ると恥ずかしさも、後ろめたささえ何処かへ飛んで行ってしまつて。

「おいしいの、頼みますよ!」

『え? 食いしん坊だなあ沢田君は。お昼まだだよー?』

「お茶ですよ、みゆさん」

ところがお茶とゆう仕事をうつかり忘れていた私。

そんな私を見てククッと笑いをこらえながらもオフィスへと戻つていく沢田君。

人をドキドキさせたり、かと思えば雰囲気を壊して和やかな空気を作り出したり

不思議な人だな、沢田君つて…。

* * * * *

やがて迎えたのは、就業時間を示す定時・5時

まだ赴任したばかりだからなのか

外回りや会議が多いみたいでアキはあまりオフィスにいない。

そんな中、帰り支度をしていた頃

いつもの如く、デスクの向こう側から奈緒の誘いの声が掛かる。

「今日久しぶりに3人で飲み行かない?」

『あつい～ね～! いくいくー! 絵里花もモチロン行くでしょ?』

「行くけどお 私は途中でバイナラするからあ

「何、男とでも約束してんの？」

と言つても、口ひして3人で飲みに来るのは何週間か振りで、前の時を繋げるよつに、前からよく来ていた隠れ家的な居酒屋さんに入った。

すると間髪なく本日の本題に入る奈緒、そして興味をツツく絵里花

「みゆ、昨日はどうだつたの？」

「なになに？ 昨日つて…」

あ、そつか、絵里花には言つてなかつたんだつけ と

昨日沢田君とデートした事を絵里花に話したは良いけれど

「絵里花、あんた口軽いんだから振れ回るのはやめなさいよね」「わかつてゐつてえ。沢田つちやるう…で？で？進展はあ？」

何だか奈緒はお母さんバリに絵里花のお世話を焼いていて。

『告白』されたけど…まだ返事できなくて』

「ふう〜ん、そ〜んな事になつてたとはねえ〜〜

「ま、後は沢田の頑張り次第つて事よね」

あんまり頑張られても困るよつな…

「そんなことよりみゆ〜主任でえ、どんな人なの？」

”そんなこと”つてちよつとビビこよつな…

『ん〜言葉少なめで素つ氣ないといあるけど

本当はすこしく優しい人だと思うよ？今はどうかわからぬいけど

こつして次第に話を自分へと持つていくのは、絵里花のお得意技。

… そうだったねアキ、昔からアキはいつも優しかった何年経つても、人つてそんなに変わるものじゃない。でも… 13年経つて、アキは 見違える程大人の男の人になつてた。

『絵里花は アキが好きなの?』

「うんっ! 心配無用? 主任は他の男とは違うからあ 私、マジになつちやつたんだあ」

だから余計氣になるの…

絵里花に言い寄られたらきつとどんな男の人だつて悪い氣はしないはずだから

アキもきっと絵里花を受け入れてしまつんじやないかつて。

このモヤモヤした気持ちは行き先不明、それでいて 果てなきモノ。

「 あつー って事でえ、この辺で私はバイナラするねえ」

やがて 盛り上がりが最高潮に達している中でも いつになく時計を氣にしていた絵里花が お化粧直しをしていたかと思つとすぐつと立ち上がり

「 今日はどこの男よ?」

「 ひ・み・つうう~」

奈緒が食つてかかるも、そそくさルンルンとお店を出て行つてしまつて。

アキに「マジっつて言つても他の男の人はちゃんと確保してゐるんだ…さすがだよな。

「みゅいいの？アレほつといて

『んー？何がー？』

「友達のターゲットが自分の兄つて妹としては妙な感じじゃない？」

そう だよね…私は何考へてるの 絵里花がアキに本気なのかとかアキが絵里花を好きになるんじやないかとかそんな事ばっかり…

「まああの主任が絵里花を相手にするとは思えないけれど

そして奈緒がテーブルに頬杖をつき何やら悩ましげな表情をしていたのも数分で結局、その後絵里花の男癖の話で盛り上がり上がつてしまつたのすぐ後だつた。 そ

奈緒とお店を出ようとした時に鳴つた携帯が良くも悪くも、私を禁断の縁へと陥れていくことになる。

「…みゅ？今の電話誰から？ どうかした？」

『アキが体調崩して今、絵里花がタクシーで送つてゐるつて…』

「絵里花が？ちゃんと主任と会つてたの？」

”男を確保してゐる”だなんて、私が呑氣すぎたんだ絵里花が待ち合わせしてた人つてアキだつたの？

私の事好きとか言つておいて、ちやつかり絵里花と会つてたの？

意味わかんないつ。やつぱり アキが分からなによ…
そう思いつつも帰路を行く足が自然と急いでいた。

「みゆー…おかえりい」

程なくして辿り着いた家

その居間には、お母さんとお茶を飲みながらくつむこでいる絵里花の姿

「あら、みゆ。お帰り~

アキが途中で体調崩したみたいで絵里花ちゃんが送つてくれたのよお

『アキ、は…？』

「主任は部屋で寝てるよお熱がすゞーーーあるのよ

まるで同じ家族だと言わんばかりに、桜木家に馴染んでいる……
他人の女の口”

「昔から体が丈夫な子だったのに
離れてる間に変わっちゃったのかしらねえ~

私のせいだ…昨日、私が雨の中行くのを追いかけて来てくれたから…

「みゆ、アキのタオル替えて来てくれるかしら？」

『うん…』

そう責任が後押しされて、お母さんからタオルを受け取ろうとしたの
だけれど

う。じとばかりに素早い絵里花の手に、横からサツと取られてしま

「おばさまっ！私が行つてきまます

みゆ帰つてきたばつかだしい座つてえへへ

あらあ、絵里ちゃんわつきから悪いわねえ？頼んじやつていいかしら。

いわねえ

彼女じゃないって、お母さん 多分……だけど……。

絵里花のことは変わらずは大好きなのに、アキがどうこうの前に大

アキの彼女かの様に振る舞う素振りを見てると、何となくいい気持ちがしない。

それにしても アキ 大丈夫かな…

そうアキの容態を気に掛けながらも手持ち無沙汰になり着替えようとしてアキの部屋の前を通り過ぎようとしていた時その部屋から微かに漏れた甘えた声に、眉がきゅっとシナる。

大丈夫ですかあ？お薬、飲んでくださいねえ

私だって、心配なのに……。

今日はアキの部屋の扉がものすごく遠く感じた…。

…やがて夜が更け、絵里花が帰ったことにより静かさが戻った桜木家
アキはきつとベッドに横たわったまま
そして私は相変わらず、アキの部屋が気になり眠れずにいた。
アキの看病で忙しそうに家を駆けまわるお母さんを、少し羨ましく
思いながら。

「お母さんもひ寝るけどみゆまだ起きてるでしょ？アキの事頼むわ
よー」

『はーい』

だからかな、お母さんに頼まれてやつと 部屋の前まで辿り着けた
の。

薬は絵里花があげたみたいだし、後はタオル替える位…だよね…。

『アキー？入るよー？』

そう緊張してちゅうぴり攝した気分、アキはべつに眠っていた。

だから何となく部屋を見渡してしまった。

この部屋入るの 久し振り。

けれど変わったのは私たちだけで、この部屋は昔と何も変わってない。

よくここで遊んでくれたよね、遠い遠い昔……。

それにもしても、眠っているアキを見ていると少しあと笑いそうにな
つてくる

いつも眉間にシワ寄せでキリッとしてる顔とは全然違つて、無防備なんだもん。

なんてクスクスと笑みを零しながらも
起こさないようにそつと、古いタオルを取つてオーテ口に手のひらを
当ててみたけれど
お薬がまだ効いていないのか、熱せで手がじんじんする…

私のせいで ごめんね…。

そう心の中で呟いた 時
同時に新しいタオルを馴染ませるようニアキのオーテ口に置いた
時

吐息混じりの声が、熱に潤んだその眼差しが、私を呼ぶの

。

「 み、 ゆ…?」

『「めんつ起つじめやつた? 冷たい物でも持つて来るね! ちょっと
待つて…』

でもね、いつもして面と向かうのはアレ振りだから何だか恥ずかしく
ベッドの脇から離れようとしたのだけれど、やつせさせてくれなくて。
とても熱くなつた手に動きを封じられてしまった。

「 行くなよ…」

うつすらと目を開けて何かを訴えて掛けているようなアキの視線
昨夜の告白とは裏腹で、力なき柔らかい声

「 むひ少し もばい、こいくれなにか…」

いつもならもつと強く私の手を握むの

今日のアキの手は熱くて、弱々しくて 放つておけない…。

『 うと いこよ…』

そうして私はアキの手を、きゅっと握り返した。

＊＊＊＊＊

けれども。そばにいてつて

こんな至近距離で手繋いだまま一体どうすれば…。

アキの熱が繋いだ手からじんわり伝わってきて私の胸も熱を帯びて
くる…

『 の、喉乾いてるでしょ？すぐだから、やつぱり持つて 』

「 離れて行くなよ… 』

それでも、下供みたっこ、口ネるアキがすゞしく初々しくて
弱ったアキがどうしたかせんぬく可愛く感じてしまつて。

『 ふふ 』

「 みゅ？何がおかしいんだよ… 』

『 何でもないよー、ふふつ 』

アキのこんな姿つてやつとレアだよね…？

「 誰のせいでこなつたと思つてんだよ」

だ だよね…。

「……………やう言へば、木村やんね…？」

『さつ も帰つたよ』

「やうか

「

そんな中でも、絵里花のことを罵遣つアキ。

それがどうしてか、この雰囲気を乱してしまつものに思えてしまうのは

ねえ どうしてなんだろ？

？

『絵里花、 可愛いでしょう？私の血縁の友達なんだあ』

何言つてんだろ、私 こんな事言いたいんじや

「みゆ以外、興味ない…」

”絵里花のこと好きなの？”と

本当はそう聞きたかった私に、アキは心見透かしたように答えてくれて。

この時はそんな熱い想いが、たまらなく嬉しくて。

「昨日は 沢田と会つてたのか

『えつ！何で知つてゐの…？』

だから漫つていた心がいきなりのシッコリ、驚いてしまつ。 今日、絵里花に聞いたのかな…ほんとお喋りなんだからつ

「みゆは 沢田が好きなのか？」

『んー、何かそういう対象にはまだ、見れないつてゆーか

何か、お兄ちゃんに恋愛相談してみたいだな つてーそのまんま
…

『アキい、寝た方がいいよ? 寝付くまでここにいるから、私

なんて、一人でドギマギして何やつてるんだろう 私
アキの皿がどんどん虚ろになつてく。

「 みゆ…?」

けれどね、アキ 布団に隠れて繋いだ手がすくいケナイ事をして
いるみたいで

無性こじキドキしあわせ。

『ん ? なあ?』

「簡単にキスされてんな」

「…、それって? 出逢った田と昨日の田両方だよね?

「嫌だつたら拒めよ。そんなスキだらけだからつけ込まれるんだ」

アキが それを言つちゃうの? アキも大差ないじゃない。

そんな事言われたつて、自分でも何で拒めないのかわからないんだ
もん。

「俺は、もうみゆを妹としては見てやれない

」

なの、こつもれつ…。困惑している暇なんて『えではくれない。田をつむつたまま呟くようになつてゐるアキがたまらない気持ちを運んでくるの。

「もうみゆを泣かせたくない。

だから 嫌なら俺を拒め。みゆを 大事にしたい

アキ…。胸をぎゅっと摘まれたように切なくなる

それにも増して温かく熱い何かが内の内からこみ上げてくる。あつとずつと そんな行き場のない気持ちを抱えていたの…？

「 でも 叶うなら…みゆに恋されたい…」

アキの想いが熱い手からどつと流れ込んで来て

その想いが巡り巡つて私の田をゆっくりと潤してゆく…。

「好きになつて、『めん、な』

アキい …。

音も立てずこぼれ落ちる涙の雲のお陰で

シーツを浸らせるシミは大きくなるばかりで。

眠りに落ちたアキの寝息でさえも涙が流れる理由になつていた。

繋がれたアキの手の温もりが、こんなにも恋しい

ねえ 愛しいの…。

#9 イトしい温もつ -?-(後書き)

やつと口内で来ましたーあ
今の私からしてみるとこの辺、ウフすぎて笑えるーー爆
さすが処女作の拙さ爆裂なのです

次回やつとー第2章に入れん…かな?長くてすみません。。
じれじれさせながらも、着実に溺れさせてゆきますね
読んで下せる方皆さま、心より感謝致します*

Introduction

ねえ、アキ 覚えてる？

いつでも頼もしかったアキの看病を初めてしたあの夜
熱で意識飛び飛びだったみたいなのに
お布団の下で繋がれた手は、きつく絡めたその指先は
決して私を離してくれなかつたよね。

今でもこの手に残つていろよ あの日の手の温もり。

アキの本当の優しさに初めて涙を募らせた日だったの
アキの本気の気持ちを初めて素直に感じれた時だったの
だから アキを近くに感じたい時はいつも思い出すの

あの日この時に刻まれた、その 情熱を 。

ねえ、アキ ？

このアキの温もりを思い出せなくなるまで 後 どれ位なんだろう
ね

けれど私は いつも祈つてるよ。

消さないで…

私からアキの温もりまで 取り上げないで…

* * * * *

#110 アンフェアな駆け引き

side アキ

朝…か…

目覚めたのは、熱のこもった布団の中
うつすらと視界が映し出るのは、カーテンの隙間から微かに希望を

魅せる零れ日

昨夜は確か 木村さんと飲んだ後、家まで一緒に来て……みゆ ？

手に微かにみゆの温もりが残っている様な気がするが
ここで何を話したのだろうか、俺は何を口走ったのだろうか
熱で頭が朦朧としてたせいか、あまり記憶が無い。

「ア、アキい？ 調子どー？」

そんな時ドアの隙間から覗かせたみゆの表情で、安堵が胸を撫で下
ろす。

見ればすぐに分かる、傷つける様な事は言つてない様だ。

『ああ、大分いよいよ』

「そ、か。ならよかつた…」

…いや、何かがおかしい。やけに俯き加減で俺を見つめている。

俺の、気のせいなのだろうか…？

『…どうかしたか？』

「つづん、何でもない…会社、行けそう？」

『ああ、赴任早々これ位で休めないからな』

そうして、いつもとは違つみゆの妙な雰囲気が気になりながらも通勤と共にしていた時だった
執拗に目を擦る、みゆのあからさまな異変に気づいたのは。

『昨日寝れなかつたのか?』

「…アキが手、放してくれなかつたから……」

寝不足と言つよりも、それを理由に隠そうとした涙の跡がそんな可愛い証拠を隠しきれていないお前が頬を赤く染めてコクリ俯いているみゆが 可愛くて仕方がない。

『みゆ

「んー?」

『昨日はありがとな?』

さすがにまだ熱が下がり切つてないせいか、まだ頭が重くダルさが残るけれど、みゆの温もりが残るこの手を感じるとそんな事はどうでも良い、些細な事に思えた。

そうして、新宿西口のビル街に差し掛かった頃みゆと並んで歩いていると、遠くからみゆを呼ぶ声がする悪さを犯した訳ではないが、存在自体が俺を憤らせる奴の。

「みゆやーん!…おつとー主任もいたんスねー兄妹仲いいつスね?」

沢田…。まずは上回だろ 気付けよ…

「沢田君いつも爽やかだねー！」

は？ 脳天気なだけだろ…

「みゅさん、今田も可愛いつスね」

「や、んなこと」

「

ふざけんな、俺が言いたかつた事を先に言つな。

…と色々言つてやりたい所だが

苛立ちを收め、会話を聞きいていない振りを貫きつつも

上司の俺を差し置いて、さもみゅしか見えないかの様なひたむきな

沢田に

大人げなく敵意を感じていたんだ。

「みゅさんー今度飯食いにいきません？

うまいんスすよーあそこのパスタとピザー！」

『うーん… そうだねー』

それ故に、みゅの瞳がチラチラと俺を頼りのものなら、俺はわざと目を逸した。

「ピザ生地は手打ちなんスよ、運が良いとパフォーマンス・ショーが見れて…」

「あははっーそれすぐいねー！」

だがフと視線を向けると、いつしか記憶に遠いみゅの笑顔が舞つて

いた。

俺の前では困った顔や泣いた顔が多く
あんな風に笑うみゆは、遠い妹の記憶を辿った先にしかない。
俺にはみゆを一生、笑顔にする事はできないのだろうか。
この想いが朽ち果てるまで。

みゆと沢田が眩しい太陽の日の光を浴び
明るい場所に居るのを俺は、微笑ましくも…羨ましく思つた。

所は変わり、出勤後のオフィス

主任室の扉を潜るなり颯爽とやつて来た、悩みの根源…木村さん。

「風邪、もういいんですかあ？」

『ああ、昨日は悪かったな』

「主任なかなかお薬飲んでくれなくて困りましたよお」

ついでに俺の目の前でこつして彼女ヅラを振る下げている訳だが
うちの家に来てそんな事までしてたのか みゆの前で……。

みゆの友達じゃ邪険にする事もそうそうできなこと
当たり障りなく接していたつもりだが
手遅れにならないうちにきりんと断りつと

今この時早速に、昨夜の続きを話そうと木村さんを誘つたんだ。

だが 木村さんがあんな爆弾を抱えていた等
思いもしなかつたんだ

…

選んだ場所は、手短に済ませようと新宿東口のとある店
前歴がある為、変な気を起さない様にと選んだ健全も健全な創作
居酒屋。

「主任が誘ってくれるなんて嬉しいですぅ~」

『…早速だが、君と付き合つ気はない。それが言いたくて今日誘つ
たんだ』

「まだ来たばかりですよお? いきなり随分シラケる事言つんですね
え…」

空気読めなくて悪かったな…この女といふと、ビットと疲れる と
疲れを洗い流す様に俺はビールを口に流し込む。

「遊びでもあたし構いません

彼女いないならそれ位いいじゃないですかあ

…本気で言つてんのか? 何故そこまで俺に執着してくれる?
そう、どう話を切り返そうかとフと田を泳がせた時だった
見慣れた人影がこの田を貰いたのは。

『 兄貴…?』

先陣を切つて店の店員に案内される…兄貴
そしてその兄貴が柄にも無く肩を抱いている女性は…みゆの友達の…

「あれ?え? 奈緒 と専務だあ~

『あ、ああ』

岩崎さん？

何か見てはいけないものを見てしまった気がして、声を掛けられる訳がない。

「いやんな会社の近くで会つてたらすぐバしゃりますよねえ？」

バしゃるつて…

『2人はそういう関係なのか？』

「もおおおお。ヤボなこと聞かないでくださいよお」

参つたな まさか兄貴が…。

* * * * *

店内に俺達が居る事に全く気づいていない兄貴と岩崎さんその傍らでカシスウーロンをひたすらおかわりしている木村さんと焼酎グラスを片手に呆然としたまま、遠くの席を見つめるだけの俺。極普通の恋人たちの様にイチャイチャしている訳でもなく大して会話を交わしている様子もなくしかし、もう一つで見ればやましい関係に見えなくもない。こんな場面に出くわすとは 驚いたな…あの兄貴が浮氣かよ？やはりワケありだったか…

「主任～～話聞いてます～？」

それより今はこっちか…

『……好きな女がいるんだ。悪いな、木村さん』

「えーっでもその人とは付き合っていないんでしょう？彼女居ないつて言つてたしい

ならあたしと付き合つてくれてもいいじゃないですかあ　お試しでも可』

しかし思つたより食いついてくるが故に、断固として口を貫いて

いたんだ

いう言う女は自分を見てくれない男には、すぐに愛想を尽かすだろうと。

『もうあいつしか見えないんだ、それに君みたいな女に興味無い』

するとあんなにお喋りだつた木村さんの口が、途端に塞がる。

これだけハッキリ言えば木村さんでも引くだろうと、俺は甘くみていたんだ。

「それなら仕方ないですねぇ…』

そういう木村さんの声のトーンが少し下がり

やつと納得してくれたか…そう思つたのは、ほんの束の間だつた。

「あたし…実は見ちゃつたんですよねぇ

主任が来る前の日の夜みゆとキスしてたのぉ

突然に飛び出したタブーは、俺が耳を疑う間も『えない程の衝撃だつた。

「知らなかつたんですよねぇ？

まさか知つてて妹とキスなんてしませんもんねえ？近親相姦です
もんね～～

アレを見てたつて言つのか……？

『それを、みゆには ？』

『言つてませんよお？みゆ隠したそつだつたし』

『なら何故俺には言つ？』

「ムフフ 駆け引きですよ。主任とキスなんて羨ましいなあ」

みゆに言つてないだけまだマシなんだろうが……駆け引き？

俺がソレを口に出しただけでも怯えたみゆに、言つていつのか？
だがもうその事は俺達にとつてはタブーじゃない

そうと分かっていても木村さんの事だ みゆにビリビリ方をするか…

「そーんなにみゆに言わないで欲しいんですかあ？」

人の顔色読むのが上手いな…本気で言つとは思えないが。

『…俺に何をして欲しい？』

少しでも、みゆの笑顔を壊す事は絶対にさせない…。

* * * * *

「う～ん。主任の彼女にして欲しいなあ」

『何度も言わせるな君を好きになる事は無い。
好きじゃない女と付き合つ程暇じゃないしね』

とキッパリ言ったものの、好きだからと言つて女と付き合つた過去は無く、体の関係を持つたどの女を好きだつたかさえも疑わしい位だ。

「そこまで言われちゃうとなあ

主任冷たいし、彼氏にしてもおもしろくないかもなあ

入れ込むのも速攻となれば飽きるのも早いって訳か?

まあ、俺としては好都合

「じゃあ～～キス、してくださ～」

は？何でそうなる？

『諦めたんじゃなかつたのか？』

『せつかく駆け引きしてたのに何も無しでは帰れませんよ～』

呆れた…ま、そん位の事で済むなら俺としては乐でいいが。

「でもおみゅにしてたみたいにいひやんとしたキスですか？」

『そんなんじつくじ見てたのか 悪趣味な女だな』

楽しそうに笑つてゐる木村さんの仕草を見ていたと
小悪魔に見えてきて仕方がないのだが。

「してくれたらあみゅには絶対言ひませんからあ

…キス位でみゅの笑顔が守れるなら安いものだと

俺は安易に考へ過ぎていたのだろうか。

『分かつたよ、約束は守れよ?』

「神に誓います じゃあ、帰り際に夜空の下でえ~」

木村さんは遠くを見つめて妄想に入っている様子の木村さんがこの時は煩わしくて仕方なかつたんだ。

『上へ向け、 今してやるよ。』

キス位でそんなに嬉しいのか…? 女って、不思議だよな
木村さんは満足したみたいで案外あっさり帰つて行く。
それが故に、この件はキス一つで解決したのだと…勘違い甚だしかつた。

「まだ風邪治つてないのに…こんな時間までどこ行つてたの?」

しかし俺は、何にも気づいていなかつたんだ。
家に帰ると、居間のソファーで一人テレビを見ていたみゆを田にし
ただけで

何故か安心感と安らぎが、この胸に訪れる。

『 母さんは?』

「ん~なんかね、大学時代の同窓会で今日遅くなるつて。」

『 そうか…』

だからか、特に何を考えていた訳でもないが自然と体が引き寄せられ
みゆの座るソファーの隣に気だるく腰掛けた。

「だい、じょうぶ

? まだ体、つらいの?」

『ああ』

みゆがそばにいる それだけで今日の疲れも全て吹っ飛ぶ様な気がした

みゆがテレビを見て笑っている それだけで俺がここにいる価値を見いだせた

そして俺は想いのままに、みゆの小さな背中を後ろから抱き締める。

「アキ? 酔ってる、の？」

『ああ……』

こうされても抵抗しないみゆは俺の事どう考えてるんだろうな
そんな事を頭の片隅で想像しながら。

他の女なんかいらない。みゆだけが欲しい……。
だからこそ、キス位何でもないと思つていた
さつきの事でみゆを守れた氣でいたんだ

だが、俺は浅はかだった。

あの夜の事をみゆに暴露されるよりも何よりも
みゆの笑顔を奪つたのは他でもない あのキスだった……。

#1-0 アンフェアな駆け引き（後書き）

こんばんわ！最近更新率が高い如月らむです
いやいや、早くですね、あの scene が書きたくてですね
決して欲求不満とゆうわけでは： 墓穴。爆-！

けれど。ここのらへんのアキミゆの気持ちは
大事に大事に書いてあげたかったので
完全版を書いて改めてよかつたと思えます。

それもこれも、読んで下さる方がいてこそのものなので
皆さまには本当に感謝しています

では、お次らへんでらづぶに突入しますので
引き続きよろしくなのです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6181y/>

愛しさも、切なさも。

2012年1月10日23時49分発行